
戦艦越後太平洋戦記

加来間沖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦艦越後太平洋戦記

【Nコード】

N0112W

【作者名】

加来間沖

【あらすじ】

戦艦越後その生涯。太平洋戦争の始まりに生まれ海の王者として生まれた戦艦。

その戦いの戦記。

始まり

1936年 2月 「いやあ立派な戦艦ですな」豊田副武が言う。
「そうだろう」嶋田繁太郎も言った。他の軍令部の方も口々にいった。

ここは長崎の造船所だ。軍艦行進曲が盛大に流れている。民間人が歓声を上げている。

- ・排水量 49500t
- ・全長 242メートル
- ・全幅 34.3メートル
- ・喫水 9.7メートル
- ・速力33ノット
- ・蒸気タービン18万馬力 4基4軸

まだ上の構造物が完成していない進水式より一層際立って得るのは当たり前だ。

主砲 51口径40センチ砲三連装三基（前2 後1）
副砲 50口径12.7センチ10門（両舷配置又、角度70度射撃可能）

25ミリ機銃連装十基二十門

ついでにカタパルト1基と水上機2機

甲板装甲 210ミリ 弦側 500ミリ 艦橋400ミリ 主

砲天蓋200ミリ 前盾は400ミリ

定員2200名

化け物のような装甲で目立つのが弦側装甲500ミリだ。

「山本五十六さん。本当にあんな装甲必要だったんですか」「ハッ米内君その内分かるよ」続けて「今や航空機の時代なのだから

むしろアレでも足りないぐらいだ。特に対空砲が「そういうと山本は湾を後にした。

ワシントン条約を逆らった海軍だったがもう関係ない。戦争は始まっている。始まっているのに戦艦をわざわざ公開するとはスパイを恐れていないだろうか？そんなことを言う人はいなかった。

1935年12月1日 日米戦は始まった。それを語るために時間を戻そう。時に1934年8月の暑い日のことだった。

始まり（後書き）

新作です。よんでくれてありがとうございます。

戦艦か空母か…

海は暑い日差しを受けながら青々としている。そしてその上に小島に天守閣というのがふさわしいだろうか、戦艦長門がそこにいた。ここは広島湾 呉港である。

1934年8月15日 中華人民共和国との戦争の緊張が走りそわそわしている者を笑うかのようにどっしりとその船体を浮かべていた。中国が人民共和国になっているのは共産党が支配しているからだ。

長門には今回新長官が乗ることになっていた。鴨田繁太郎である。治安がまだ悪い農村では欠食児童が目立つ中、堂々とした姿がそこにはあった。

その堂々とした体にふさわしい連合艦隊司令長官として長門に向かった。海行かばが流れ、弦門からハッチまでカーペットが敷かれ、士官達の敬礼に答えながら1歩1歩ゆっくりと歩いていった。

山本五十六はこの時期航空隊のほうへ就任した。しかしこれは実は左遷である。そうこの人物が鴨田に職を譲った人物であり、鴨田をソファアに座って待っていた。

そして山本は口を開いた「鴨田。海大以来だな」長官公室のドアを開けるなりその声が小柄な山本から大きい声として出た。そしてその声が鴨田の耳に入った。

鴨田は「今回は連合艦隊…」「挨拶はそうではない。昔を同じく貴様で話さないか？」全くうわさに聞いていたがこういうのを気にしないのが山本長官らしいところだ。そして話をその後続けたのだが、政治のことなどで全く分からず、何も分からない自分がいなくてしょうがなかった。もちろん山元にも腹が立った。

しかし、やがて司令長官に選ばれた理由などでは自分は十分に期待されていることが分かってすつきりした。十分ほめたところで山本は本題に入った。「貴様は戦艦無用論・航空機無用論どっちだ？」と聞いた。答えは決まっているのだ。「戦艦を航空機で沈めるなんてかなり難しいでしょう」

と航空機の性能をやや小評価していったが、この時代だから普通といえは普通だ。それでも山本は話を続けた。航空機はいまや発達して魚雷なども我が軍の機体なら十分可能といていた。

鴨田はだんだん聞く気がうせていった。「いまさらそんな事を……」鴨田は高い声でコスト面のことも話した。さすがの山本もここまで言われては弁明の余地が無くなる。軽い会話をして去っていった。

しかし鴨田は全く航空機に関心が無いわけではなかった。航空機の力を実は鴨田はやや評価していた。洋上を早く動き回り、敵の艦隊の発見がしやすい。しかし実績が無いのだ。

しばらくして鴨田はこう考えた。空母の優位性が実証されるかどうかは戦が起きないと分からない。しかし航空機の力は侮りがたい。そこで空母を守り航空機の攻撃を受けないようなものにすればいい。

1934年10月9日 金剛級にそうとうし、航空魚雷を1本受けても戦闘に支障を受けず、2本受けても5分程度で修復する防御力を求め、どうせなら長門級より大きな攻撃力を持った戦艦を製造せよとの事だった。しかもこれを複数建造することを考えていた。米英が黙ってるわけが無いが。

そして1936年2月 完成したのが戦艦越後なのだがそれまでに対米戦のことを述べてなかった。

果たして対艦巨砲主義は正しかったのか？

日米開戦

軍の上層部ではこの日大騒動が起きていた。なんとアメリカ軍から以下のような指令を受けていた。

- ・今すぐ満州より退くこと

- ・日本が中国に持つている利益をなくすこと

以上の2つの内1つを認めなければならない。わが国と日本が最悪の状況にならない事を願う。

最悪の状況とは戦争だが、理不尽すぎる。

「国際連盟を脱退しても満州のことに口を挟み、拳句の果てには中国からの利益をなくすかのどちらだという。

このころ鴨田はいろいろ会見などがあり、全く旗艦の長門に長々居座っていられない。山口が留守を引き受けてなかったら、いまごろ訓練などに付き合ってたれないだろう。

「初弾命中 命中弾2」今日の訓練で初弾命中させた長門は今の日本情勢とは反対でかなり調子が良い。

アメリカでは「どうやら日本はわれわれの思い通りに動いてくれそうだな」「そうですね日本がこの条約を飲み込むとは思いません」「黄色の猿どもは必ず戦争をしかけてくる」とルーズベルトはうれしそうに呟いた。そうアメリカは日本と戦争が出来ればいいのだ。

鴨田は今回の条約をここよく思っていない。いや誰もが思っていないだろう。しかし鴨田はもし戦争をするならどうするという考えがあった。もはや回避することなど頭には無いらしい。

「連合艦隊の見通しはやはり1年間ですか」近衛大臣が訪れてき

た鴨田に上目使いでそう言った。顔色はあまりよくない。近衛は「対米戦は不可能です」との意見を待っている。マスコミが騒ごうがここが動かなかつたら戦争は出来ない。しかし近衛の願いとは裏腹に「日米戦になったら必ず迫り来る米艦隊を撃滅して御覧にいれましょう」続けて「我が軍は1つとなって米軍に勝って見せましょう。今だけです」と言った。近衛はがっかりした。「そうですか」しかし一体どっちなんだ。

そして近衛は単刀直入に聞いた。「海軍は対米戦回避派なのですか？それとも賛成ですか」と聞いた。

総理が困っているのは鴨田は分かった。しかしここで「対米戦は不可能」といったら国民からの反発がひどいだろう。その事と鴨田は勝つ自身があつたため実は賛成派でもあるのだ。

そして戦争やむなしとの結論に達するのに時間はかからなかった。

御前会議 「もはやアメリカと戦うしかありません」つい1ヶ月前「これ以上アノ条約が認められないなら日本に物資の輸出をしない」とまでいつてきたのだ。もはや戦うしかなかった。

アメリカに対し12月1日 日本はアメリカに宣戦布告。また3日前に総理は近衛から東条になった。

12月1日〇〇七〇 宣戦布告をした30分後日本はハワイの真珠湾にて、潜水艦による攻撃を開始した。送り込まれた潜水艦は12隻で防音ゴムなどを施していたりもした。

ハワイでは対日に燃えていた。そしてアメリカの旧式艦隊が湾内

から動き出した。そこに潜水艦がひそんでるとも知らずに。

「広い湾内に出てきてくれるとはありがたい」潜水艦艦長の森下は言った。

戦いは始まるうとしていた。

太平洋艦隊を撃滅せよ

戦艦アリゾナが湾内から出てきた。駆逐艦が前に3隻いる。その後ろにはオクラホマがいた。また軽巡洋艦デトロイト ホノルルや重巡洋艦のニューオーリンズ サンフランシスコなどの艦がどんどん出てきた。

戦艦カリフォルニア メリーランド テネシー アリゾナ オクラホマ ウェストバージニア ペンシルベニア ネバダ

重巡ニューオーリンズ サンフランシスコ

軽巡デトロイト ホノルル セントルイス ヘレナ ローリー
フェニックス

駆逐艦30隻

一体何しにきたのか理解できないが幸運だ。

潜水艦は1度潜水することにした。「アクティブ フロー」潜水艦の横の弁が開き中に海水が入り込む。潜水艦はゆっくり海中に潜っていった。

「魚雷は全て装填終了しています」「うむ距離は」という問いに「現在距離1800 方向は80度」とすばやく返事が返ってきた。艦長は顔に笑みを浮かべた。こちら側に潜水艦6隻。そして向こう側にも6隻と配置している。両方から魚雷を発射させようと考えてある。

彼らが乗っているのは伊八型潜水艦だ。伊八はやや小型で50メートルまで潜行が可能で、水中速度が8ノット 水上が17ノットとなっている。魚雷発射官は前に4基と後ろに1基と魚雷15本。定員が50名となっている。防御力が薄く定員が少ないがその分、

少ない資材で作れるため量産が可能だった。

「艦首2本発射！5秒後にもう2本発射」艦長の命令により発射された。この潜水艦が乗せている魚雷は95式1型魚雷だ。射程は5000とやや短い、速力は49ノットも出せる。

艦長は同士討ちを避けるため50メートルまで潜行した。

海面では22秒後爆発音が聞こえた。海面で水柱がたった。右と左から12本そして数秒後に又12本が襲い掛かってきた。アメリカ艦隊はなすすべが無い。

周りにいた駆逐艦や巡洋艦が次々大破または沈没していく。戦艦はカリフォルニア、メリーランドに計2本ずつ命中し航行不能。アリゾナが右に2本と左に1本が直撃した。マストを超える水柱が立つ。さらに右に数秒後もう1本が命中した。1回目で弦側装甲が突き破られているところにもう1本魚雷が命中したのである。缶室にどんどん浸水して。やがて沈没しだした。

また避けようとして駆逐艦と衝突したりして2次被害も深刻だった。戦艦ネバタが重巡洋艦サンフランシスコの横腹に角ばった艦首を差し込んだ。差し込まれたサンフランシスコは大破した。

そして動きが取れないところに2分後に第3次波がやってきた。ようやく落ち着いてきて、カタリナ哨戒機で潜水艦を沈めてもらうとしたときだった。戦艦カルフォルニアとメリーランドは航行不能だったため10本ほど水柱が立ち、そのまま沈没。

何とか浮いていた巡洋艦が海に引きずりこまれていく。

オクラホマ ウェストバージニアは沈没艦で動きが出来なくなっていた。そして無理に動こうとしたとき、オクラハマの艦首がウェストバージニアの横腹にぶつかった。速力18ノットで動いていたのがぶつかったのだ。被害は甚大だった。艦首が完璧にめり込んでいるのだ。

ウェストバージニアは右側にオクラハマを突っ込ませて苦しそうだった。すると左から魚雷が来た。

「左から魚雷を3本確認」もはや運命は決した左に水柱が立ち上りオクラハマの方面に蹴飛ばされたような衝撃を感じた。そして1度右側に浮き上がりまた左側に傾いた。そしてその時オクラハマが取れたのだが、ウェストバージニアは非防御区域に当たったらしくあつという間に沈んでいった仲間達の後を追った。そして大爆発を起こした。どうやら格納庫の弾薬が爆発したらしい。オクラハマは目の前で爆発が起きた訳だ。艦首が浮き上がり爆風で船員が吹き飛ばされた。そして下から爆発したのだから艦底が破壊された。大穴が開いた艦底から大量に海水が浸水してきた。ウェストバージニアに突っ込み、そして今度は頭から海に突っ込んだ。

結果として 戦艦はカルフォルニア メリーランド ウェストバージニア オクラホマが沈没した。

またテネシー右舷に2本受けてしばらくドッグ入りだ。

重巡ニューオーリンズが沈没。サンフランシスコ大破。

軽巡ホノルル ヘレナ ローリー フェニックス沈没。他2隻は中破した。

駆逐艦は13隻が沈没した。また4隻が深刻なダメージを受けている。

ルーズベルトはこの損害に驚愕したが、しばらくして冷静になった。(フン。ジャップの猿がこの程度の損害たいしたことはない)

日本側はこの後4隻が沈められた。しかしそれからさし引いても大戦果だ。

12月3日　〇〇三〇　1隻の船が真珠湾に向かっていた。

太平洋艦隊を撃滅せよ（後書き）

どうも。更新遅れてすいませんでした。

さて今回出てきた潜水艦は実在しません。
著者の勝手な架空兵器です。

真珠湾攻撃は潜水艦の攻撃で壊滅的なダメージを受けた。そこに
向かっていた1隻の船とは？

扶桑突入

戦艦扶桑が突入して入ってる。場所は真珠湾だ。

「フン。潜水艦のやつらやってくれるわい。しかしやはり勝負には戦艦が必要だ」扶桑の射撃手はうれしそうに呟く。

扶桑は14インチ主砲を12門搭載している。日本が始めて造った弩級戦艦だ。

しかし速力と防御力が犠牲になっている。おまけに主砲の配置の問題で一斉射撃をするだけで、艦上の構造物が破壊される。

そのような欠陥ゆえ戦艦山城、続けて伊勢 日向をつくる予定だが、山城までで建造はストップ。

伊勢と日向はまた次の機会に話そう。

12月2日 ○○二〇扶桑は真珠湾に到着した。

「主砲打ち方用意」…。「第1、2主砲打ち方はじめ」轟！！

真珠湾の燃料タンクが吹き飛んだ。1、2番主砲弾は焼夷弾を使用している。時代遅れの14インチ砲だがそんなことは今は問題ではない。

重油が流れる。「第6、5主砲ドッグを狙え」閃光…。空気をきりさく砲弾の音が真珠湾の悲鳴に聞こえる。ドッグはいつきにぶち壊された。「第3、4主砲湾口の設備を破壊せよ」クレーンが吹き飛ぶ。資材置き場などが紙細工のように粉々に飛んだ。

燃料タンクのカソリンなどが燃えて、真珠湾を照らしてくれる。そこに主砲弾が叩き込まれる。

湾内の米軍駆逐艦などに米軍兵士が動こうとしたが、すでに火に包まれていてただ逃げ惑うしかなかった。重油に火が引火した。重油は燃えにくいが燃えたら消えにくいし、ものすごい速度で燃え出すのだ。

米軍兵士が次々飛び起きて消火などに当たるが、いたずらに死傷者を増やすだけだった。陸地は燃やし尽くされ、ドッグや湾は決定的に破壊され、米艦隊も破壊されていく。

真珠湾は地獄となった。軍設備の建物が吹き飛び瓦礫と化している。湾はクレーンが倒れ燃料タンクは赤々と燃えている。船は燃えていく。破壊されていく。何もかもが…。

扶桑は主砲弾を一体何発叩き込んだのだろうか？昼間のような明るさを思わせる真珠湾を眺めながら艦長以下、船員はどこか悲しそうだった。

「艦長、自沈の用意できました。既に潜水艦が到着しています」
「うむ、総員退艦」

扶桑はこの日から大日本帝国より除籍された。そう殴り込んだら底で沈ませる予定だったのだ。しかしただ沈ませるのではない。地獄となった真珠湾口の入り口に沈ませ、再建すら難しくさせるのだ。

潜水艦が扶桑の乗員を収容した後、扶桑に向かい雷撃を行った。扶桑は自沈していつてるが、2度と浮かばさせないためである。水柱が立った。1本、2本、3本と雷撃を受けた大日本帝国の象徴の1つである、扶桑は沈んでいった。

そのころソビエトでは、「スターリン閣下。準備が整いました」

「これで中国を我が者にできるな」とスターリンが微笑んだ。日本はこの日の昼急に、ソ連より不可侵条約を結ばさせられた。

そして中国に向かい宣戦布告をした。

東京の時間で〇二五五だった。扶桑が突入する少し前である。

侵攻兵士は120万人に及ぶ。戦車も3000両を越えている。

戦闘機は1000機。火砲は1万門。

さらに日本から侵攻されないために40万と戦車1000両を貼り付けていたのもスターリンらしい。

日本が動き出したときにソ連も動き出したのだ。時計の針は戻らない。

扶桑突入（後書き）

ソ連が中国に宣戦布告。アメリカ、イギリスの対応は？
さらに日本はどう動いていくのか？

そして、ようやく戦艦越後完成！。今までタイトルにしか出てま
せんでしたね。 すいません。では次回もよろしくです。

戦艦越後出撃せよ

日本は遂に1月1日を迎えた。戦争が始まったの初の正月だ。来年この雪が降つてるころに戦争は終わつていれば良いんだが、山本五十六はそんなことを思いつもの居酒屋に向かつていた。皆さんは薄々気づいているだろう。そうドイツやイタリアと一切同盟を結んでないのだ。日本は独立を守るために戦争をしているのであつてファシズム政権とか知ったことではないのだ。恐らくファシズム打倒ということでの戦争は各国が動くので、ここで結んでしまつたら、いざというとき講和が出来ないのだ。また案の定イギリスなどの国々は日本に宣戦布告をしている。ソ連は中国領土に侵攻を進め100キロほど侵攻している部隊があるそうだ。

それはともかく戦艦越後が進水式を行われたのはもう対米船が始まる前からしていた。戦艦越後が完全に完成したのは冒頭で書いたとおりだ。

蜂の巣装甲で弦側500ミリという防御は艦底にまで及んだ。さらに速力は33ノットとなつているが実際は最大戦速が33ノットであり、最大速度は31ノットだ。

この日2月3日だ。鴨田船長はこの船に腰を降ろした。今のところ目立つた海戦は行われていない。しかし陸軍はすばらしい速度で侵攻している。が、海軍からしてみれば陸軍ばかり目立つというのはおもしろくない話だ。

とはいえ陸海軍が別々に動いては大敵アメリカには勝てるはずが無い。

そしてそれを象徴する戦闘機が開発された。96式戦闘機だ。

記念すべき期待であるため開発した中島エンジン「寿」四一型空冷星形9気筒そして610馬力の発動機を搭載していた。

速度は458キロ 航続距離は2000キロメートル 武装は9ミリ機銃×4

この機体は当初海軍が艦上戦闘機として開発したものだ。航続距離が最初の段階では短く爆撃機の護衛が出来ないことが指摘された。そのためやや大型の増槽タンクを装備する必要性が出てきた。これは機体に引付いた増槽タンクとの幅を広げることによりタンクを大型に出来た。

風防は涙滴型を採用し背後からの奇襲をされないようにした。武装の9ミリ機銃だが7.7ミリより破壊力が強く、弾道距離が長いのを要求された。そのため開発されたのが9ミリ機銃である。

7.7ミリと比べ破壊力がやや大きい。また発射速度が非常に速いため1ヶ所に弾を叩き込める。

全幅は11メートル 全長は7.71メートル。

1番気になるのが高度計や速度計だ。これはそれぞれ陸海軍で使いが違う。そのため全て海軍式が採られた。陸軍パイロットも当初使い辛かったようだがこれは慣れるしかない。

馬力似たいし速度が遅く感じるのは操縦席の背後に防弾装甲版を取り付けたからだ。厚さは8ミリで角度がよければ7.7ミリ機銃も防げる。

ちなみに9ミリ機銃の性能が気に入った陸軍はこれを拳銃として利用すべきだという案が出された。試作品を作ってみたところ、かなり高性能だった。これにより拳銃とこの機体の弾薬の企画が同じになり量産ができるようになった。

2月5日 「糞ジャップどもが」アメリカ軍人が毒づいたこの場

所はハワイのオアフ島。真珠湾だ。

燃料タンクの中の燃料より彼らにとっては燃料タンクそのもののほうが損害的に問題があったようだ。それより扶桑が湾をふさいでしまったのが問題なのだ。12月に攻撃されいまだこの状態だったが、それがようやく解決されようとしている。扶桑に空気を送って浮かばせたのだ。もちろん扶桑自体は使い物にならない。

どうやら後1月要るようだ。

この頃日本軍はマレー半島に上陸していた。

日本陸軍が必要としたのは戦車である。日本陸軍は新しい戦車を使用していた。チハ九六式中戦車だ。最大の武器は海軍が必要とせず放棄された8センチ砲である。これに空冷エンジン300馬力の発動機を載せることにした。この空冷300馬力エンジンは航空機エンジンを改造したものでやや大型になっている。そのため後部方が出っ張っている。軽量化を考えて一応実行した。のだが：

軽量方法を考えた割には速力は39キロと遅い。が、なんといつでも80ミリ砲は強力だ。日本の戦車は日本の輸送能力を考え、重量を減らす必要があるのだが装甲はやはり必要なのだ。ここで25ミリ装甲取り外し式を採用した。これにより分けて輸送し、現地に着いたら簡単に取り付けれるのだ。修理のときにも装甲を変えればいいだけの話である。

これにより日本戦車部隊は快進撃をはじめていた。

2月13日

しかしここに問題が出てきた。なんとシンガポールにいる日本潜水艦がイギリス戦艦を確認したのだ。恐らく陸地を砲撃するために本国から来たのだろう。おまけに空母までもいるそうだ。

これは困ったことになった。現在戦艦金剛などの南方に配置する

はずだった艦隊は大改装を受けているのだ。長門は速力がやや遅い。ここで海軍は訓練がようやく終わった戦艦越後を送ることにした。駆逐艦4隻の護衛艦をつけて越後は初陣に向かった。

またそのころマレー半島では九六式戦闘機で空軍部隊を繰り出し時間稼ぎをすることを考えていた。

戦艦越後出撃せよ（後書き）

陸軍がマレーで快進撃を続ける中、シンガポール付近に現れた艦隊。

空母と戦艦！！

金剛級4隻が大改装を受けている今足が速い戦艦越後が頼りだった。

マレー沖海戦 前哨戦編

2月14日〇五五〇 爆音が響いている。ここは 元山航空基地だ。マレーに迫る英国部隊を撃滅べく出撃するのだ。

編成は（九六式陸攻26機。魚雷装備17機、爆弾装備9機）が出撃する。さらに護衛として、九六式戦闘機36機を投入したいた。

また同時刻豊後水道から戦艦越後と駆逐艦4隻が出て、すでにマレーまで100キロという地点まで来ている。

〇六〇〇 マレーに迫る艦隊を発見したと偵察機からの返信が来た。そこに攻撃をするのである。「こんな朝からわざわざ出撃ですか」「そうだ渡来。敵さんは朝からマレーを攻撃する気だ。それを食い止めるのはこの時間からいく必要性がある」と隊長の若居大尉が言った。そして「全機出撃！」との号令をかけ愛機に飛び乗った。そして水平線のかなたに勇ましく飛び立っていった。

〇六二〇 「もうすぐでジャップの猿どもに制裁が下せるな」「猿の世界に法律何ザねーよ」「そうだった」と英国戦艦の上で兵士がのんきにしゃべっていた。もちろん緊張をほぐすことを狙っている。

〇七〇〇 戦艦越後が遂にマレー半島が見える位置までに接近した。戦艦越後は今回航空機が打ちもらした敵艦隊を叩き潰すのが任務だった。

案の定、航空機で戦艦が沈めれるとは思っていない。

同時刻 「艦長爆音が聞こえますな。イエローモンキーのでしょうか」「東洋人が作った航空機が飛ぶのか！まあ竹と紙の飛行機だ

焦る事はない」艦長はそういつて日本飛行編成隊をあざ笑った。

「総員対空戦闘用意！」艦載機飛ばせ。英国艦隊の内容は次のとおりだ。

戦艦 ネルソン レパルス

空母 アーク・ロイヤル

駆逐艦 エレクトラ テネドス エクスプレス ヴァンパイア

戦艦ネルソンは戦艦長門と同じく世界のビッグ7と呼ばれたものである。（世界のビッグ7 日本は長門級2隻 イギリスはネルソン級2隻 アメリカはコロラド級3隻 計7隻）

駆逐艦ヴァンパイアはオーストラリア海軍の駆逐艦だ。

アーク・ロイヤルは艦載機60機で速力31ノット。排水量は22000トンと意外に少ない。また防御力のほうは軽巡洋艦の主砲や200キロ爆弾にもたえられる用に作られている。

そのアーク・ロイヤルから36機の戦闘機が迎撃にあがった。この戦闘機はグラディエーターだ。実史では1937年に運用開始だ。速力420キロ未満 武装は7.7ミリ機銃4丁の複葉機だ。空母はいいのに艦載機はえらく旧式だ。

そして数分後空中戦が開始された。

「きたぞ黄色い猿どもだ！ん？単葉機じゃないか」「無理に1枚翼にして機動性が無いんだよ」「それかかれ」

しかし九六式戦闘機は予想外に軽い動きを行った。そして9ミリ弾が叩き込まれた。「ふざけるな」ワブレード中尉が九六式戦闘機

に機銃を叩き込んだ。

しかし防弾装甲を施した九六式戦闘機は撃墜されなかった。その機体は後ろをとった。タタタタ…9ミリ機銃の発射音が聞こえた。ワブレード中尉は「うっ」と呟き海に落ちていった。

そしてイギリス戦闘機は36機全てが海にダイブ又は空中分解して全滅した。「なんてことだ」イギリス水兵が叫んだがもう遅い。

日本攻撃機が空を覆った。

戦艦越後咆哮セヨ

96式陸上攻撃機の爆装部隊9機はすべて空母を攻撃、魚雷装備はもちろん戦艦狙いだ。対空気銃が唸る。九六式戦闘機が機銃掃射で駆逐艦に襲い掛かるが9ミリ機銃ではかすり傷程度しか負わせられない。

ネルソンに近づいた雷撃部隊が1機まともに機銃を受けて黒煙を吐き出した。「ジャップの機体はさつさと海に墜ちろ」その陸上攻撃機の乗組員は「いんですよね」操縦士が言った「当たり前だもう帰れないだろう。皆もいいよな」「はい。天皇陛下万歳」陸攻はネルソンに近づいてきた「何をする気だ」ネルソンの乗った艦長は驚きで声にならないような声を出した。もう一度陸攻で万歳との声が聞こえたが、家族の名前を呼ぶものもいた。魚雷を積んでいるため200キロという低速で陸攻はネルソンの艦橋部分に突っ込んでいった。

轟！！それは何が起こったかわからなかった。艦橋がそのまま吹き飛ばされたような感じた。船員は閃光で目を痛め爆風で吹き飛ばされた。火災が起こった。「何なんだ？クレイジーな猿度もめ！！」「突っ込んでくるなんておかしいだろ！！」ネルソンの船員は地獄の火に燃やされないように水をかけた。しかしさらなる危機が迫ってきた。艦橋が吹き飛ばされて操舵など出来たものではない。

2機が迫ってきた。1000メートル前方で魚雷を放すと急速に機体が浮き上がった。

白い尾を引いて魚雷がネルソンに迫った。轟音を立て水柱があがる。命中した場所は左舷艦首と第2砲塔の下部だ。艦首はどの船でも浸水に弱い。たちまち大量の海水が入ってきた。「おいなんでもいい。もってこい浸水を止めるんだ」一致団結で毛布などが運ばれて防ごうとする。

しかし上で火災艦首から浸水し左に傾いている。こんな状況でまともな対策など出来ない。とどめを刺さんとばかりに6機の陸攻がネルソンに雷撃を敢行した。4本の水柱がネルソンのマストの高さを超えると急激に左に傾き爆発しながら沈んでいった。

アーク・ロイヤルは現在2発の爆弾を交わしている。しかし3分前に受けた至近弾でスクリューが痛んだらしく速力が30ノットまでに低下した。「右舷 斜め方向より爆弾です」「取り舵40度」アーク・ロイヤルは華麗にその爆弾を交わしたがそれは罠だった。「そうくると思ったよ」日本軍は先読みをしていた。5機が一斉に爆弾を投下した。800キロ爆弾が2発甲板に命中した。飛行甲板はめくれ上がりそこから炎が噴出した。「誰がこんなところに火山を作れといったんだ」エレオンがジョークをいったがこんなパニック時に受けるはずが無かった。「格納庫が危ないです」「くそ火薬庫に注水だ。急げ!!」火薬庫に水が入った。アーク・ロイヤルは沈没こそ免れたがまともな作戦は不能となった。

そして20分後、魚雷や爆弾を全て使用した日本は帰路に移った。

日本側の被害は九六式戦闘機4機撃墜破 九六陸攻は5機が未帰還で4機がひどく損傷した。

イギリス側はネルソン轟沈 アーク・ロイヤル大破 駆逐艦テネドスが機銃掃射で12人が死亡7人が重傷を負った。アーク・ロイヤルとテネドスはシンガポールに向かった。

レパルスと駆逐艦3隻はシンガポールに向かわず単独で侵攻した。

そして〇九〇〇 「敵戦艦発見 恐らくレパルスと思われる」越

後の測距儀で確認された。「距離は3万6000と方角は右30度」
「うむ」艦長はうなずいた。この艦長はそう鴨田である。

「3万2000をきいたら撃て」「了解しました」越後の16インチ砲が30度方角を向いた。「距離3万2000です」「よし仰角35度撃て」閃光が甲板を覆った。長門より強力な火砲が放たれた。

レパルスの艦長フィリップスはこの砲撃に驚いた。何しろ敵の主力艦艇はいないと思っていたのである。レパルスの43口径38センチ砲では対抗できないが艦長は長門クラスでも40センチ砲だ。ロイヤルネイビーの力はその程度の溝は埋めてしまふ。「よしこちらは距離3万をきいたら撃て」

「近弾300メートル」「照準やり直せ」「仰角から俯角に切り替える。直接照準だ」鴨田の命令により俯角に切り替えられた。「俯角1度撃て」各砲塔から3連中2発が撃たれた。しかしこれはレパルスのはるか後方に行ってしまった。「2度に修正だ。撃て」3発の弾が放たれた。レパルスは何度か射撃をしていたが一向に当たらなかった。「糞、何故黄色い猿どものほうが正確なのだ」フィリップスはあせりを感じていた。そのときだった。強い揺れを感じた。「直撃だ！」ほぼ反射で言葉が出た。甲板に直撃したのだ。レパルスは巡洋戦艦だ。つまり攻撃力は戦艦だが防御力は巡洋艦と大差ないのだ。レパルスの甲板は76ミリこれでは話にならない。大火災が起こった。そして1度捕らえた艦を日本が逃すはずが無かった。9門の砲弾が放たれた。もちろん弾は拡散していくので全てが命中するわけではないがそれでも4門が命中。距離は2万3000だった。この距離なら45センチ以上の装甲が突き破られる。レパルスは主砲が300ミリでそれ以上の装甲はない。弦側に次々砲弾が命中した。たやすく突き破るとそのまま火薬庫に入り込んだ。

近くにいた駆逐艦の話によるとまず砲塔が吹き飛びながら凄まじい音を立て粉々の破片となり飛び散ったそうだ。

その日ラジオでは大本営がお祭り騒ぎしたのは言うまでもない。

戦艦越後咆哮セヨ（後書き）

なかなか時間がとれず更新が遅れ不定期になっています（いや元々不定期だけどね）。

とりあえず読んでくださった方々ありがとうございました。

艦隊大改装（前書き）

更新が遅れてすみません。 m (| |) m

艦隊大改装

戦艦金剛が比叡が榛名が霧島が大改装を終えた。金剛型戦艦は近代改装を施した。

速力が機関を8万馬力にまで増強して30ノットにまで上昇し、対空兵器が多々増強された。ホチキス25ミリ機銃単装が20丁が

付けられた。最大仰角が47度までにあがった。

副砲は14基すべてが外され60口径の副砲に切り替えた。又他にも改装工事が行われ次のようになった。

全長212メートル 全幅32メートル

主砲45口径35.6センチ連装砲4基8門

副砲60口径15センチ単装砲10基10門

高角砲40口径12.7センチ連装砲6門

25ミリ対空機銃20丁

幅が1メートル増え、排水量も3万トンに達するほどの工事になったが、副砲は非常に優れたもので1万5000メートルなら10センチほどの装甲でも打ち破れるのだ。

高角砲は八九式から九十六式40口径高角砲に転換された。初速を早くするための取り組みがされており976メートル/秒となっている。これにより高度6000メートル以内の敵に命中すれば決定的なダメージが得られた。

また高速輸送船の作成に着手した。海軍は輸送船の損失など10パーセント程度と捕らえていたため、まともな護衛をつける気はなかった。しかしここで海軍の

見積みもりが見直される出来事が起こった。それが真珠湾海戦である。真珠湾の潜水艦の奇襲で壊滅的な損失を追った。これで海軍はある程度の武装を持った

高速輸送船の建造を要求した。

武装は…そう今回の金剛型から撤去した副砲だ。馬力はそれなりに強力なものにし、スクリューをかなり大型にした。これで得られた速力は通常時に22ノットが

出せ、満載していても20ノットで走行できる。また5ミリ装甲がとりつけられた。副砲は前後に1基ずつ付けられた。また9ミリ機銃連装が2基ある。カタパルトが一基付けられ2機の水上戦闘機が飛ばせる。

これは兵士が2000名が乗れた。その分の食料や重砲が10門と機関銃が200丁。弾薬がフルで3週間持つ程度のもものが輸送できる。これが結局7隻建造予定だったが、今のところ2隻しか建造されていない。さらに海軍は海中スクリーパー音の聴音機の作製に力を入れたした。

もつとも運ぶ内容のものも肝心だ。

又今わが海軍には空母が「鳳翔」「瑞鳳」「蒼竜」「大鷹」「飛竜」「飛鷹」「赤城」の7隻である。これに加賀が加わるはずだったが廃止された。

そして今回の海戦で戦艦が航空機で沈められる事が証明された。そのため越後の対空気銃を増加させる計画ができた。

この日2月19日 日本陸軍は早くもマレー半島を制圧。シンガポール攻略に乗り出そうとしていた。

しかし、陸軍はどこか不安そうだった。そうソ連の侵攻が激しいのだ。このままでは中国を占領した後、勢い余って満州まで攻略してきそうだ。

海軍の戦艦部隊で改造されたのは金剛型だけではない。戦艦山城である。扶桑がハワイで自沈した後でも、練習艦としてしか使えなかった戦艦だ。これの主砲を全て撤去したのだ。

果たして海軍はこれをどう扱うのか？

艦隊大改装（後書き）

久しぶりです。昨日ルーターが壊れてて更新できなかつたんですよ…。

そろそろ前編の中盤に入ります。
さて山城は何に改装されるのか？

それぞれの思惑

2月21日 アメリカ軍は真珠湾を塞いでいた扶桑を遂に除去することが出来た。

そのころ海軍では「ジャップの連中は航空機でイギリス戦艦をつぶしたそうじゃないか」とキンメルが言った。「じゃあ空母を量産する必要性があるな」とアーネストキングが言った。

アーネストキングは真珠湾攻撃をされたとき「潜水艦で来るとは思わなかったがここを攻撃してくるのは分かった」という名言を残した人物だ。海軍作戦部長である。

2月24日 日本の長崎のドッグでは大改装段階に入っている山城がドッグ入りしていた。ちなみに撤去された14インチ砲は満州に置かれ対ソ連用の砲とされたいた。陸軍は海軍に恩を返そうとしたりしいが結局何もしてないままだ。

鴨田大將は山口多聞と会話をしていた。「いや鴨田さん私にこの艦を任せてくれるのですか」「ああ、俺は今まで航空機で戦艦を沈めるのは不可能と思っていたが、この前ので考えが変わったよ」「いやあの山城がこうなるとは思いませんでしたよ」山城は防空戦艦に生まれ変えあるのであった。

予定としては機銃を100門以上高角砲50門また艦載機も十機程度が積みれてカタパルトが2基装備される予定であった。また対潜用の水中聴音機を装備しテストするという思惑もあった。

山口は鴨田に感謝していたが鴨田としてはこれでしばらく黙っているだろうという考えだった。

航空隊のほうは九六式戦闘機が普及し始めていたときに新エンジンの開発が進められていた。

馬力は1000馬力以上が求められた空冷エンジンだ。またその機体も新しく作成されている。恐らく完成は来年になるため97式戦闘機と命名されるであろう。

このころ山本五十六は自分には山城が渡されなかったことを別になんとも感じていなかった。なにしろ新型戦艦の授与が言い渡されたのだ。新型といっても越後の2番艦だ。

名前はどうかはまだ分かっていないが今呉の唯一空いている大型ドックで既に船体どころか主砲の取り付けさえ行われていた。

シンガポールでは上陸した日本軍戦車部隊の圧倒的な攻撃力になすべなく逃げまどったいたオランダ軍は早くも貯水タンクを破壊され降伏に追い込まれていた。その数8万人。

いまや無敵皇軍とどまることを知らず侵攻を続けていた。

その頃ソ連は中国の領土の10分の1を蹂躪していた。英国軍はドイツが変な動きをしないように見守る必要性があった。

そして日本はマレーのことが終わったら一気にボルネオ島やフィリピンに侵攻すべきだという作戦にまとまった。シンガポールにいた艦隊の内アーク・ロイヤルである。修理途中で日本軍が侵攻してきて一気に艦隊が逃げ出したがこの艦と巡洋艦のエクセターが脱出時に日本艦隊により拿捕された。

アークロイヤルはそのまま修理され廃止された「加賀」として扱われることになった。エクセターは白土湖 からとって白土ちひと名づけられた。軽巡洋艦は日本では川や山の名前がつけられていた。

ちなみに戦艦は旧国名で空母は造語や同じく川の名前や旧国名な

どとまちまちであつた。

米軍はフィリピンに日本軍がやってくることは察知していた。また日本軍は来るだろうと感じていた。

第三艦隊「赤城」「鳳翔」「瑞鳳」「蒼竜」

第二艦隊

第一遊撃艦隊「越後」「金剛」「榛名」「山城」（一応特型戦艦となっている）

第二遊撃艦隊「長門」「陸奥」「比叡」「霧島」

第一艦隊「高雄」「愛宕」「摩耶」「鳥海」

第二戦隊「妙高」「那智」「足柄」「羽黒」

それぞれの艦隊に駆逐艦が4隻ずつ付いていた。

（給油艦等を除く）

つまり計40隻の戦闘艦が集結するのだ。またこれから3時間遅れで高速輸送船2隻と駆逐艦2隻がフィリピンに行く。そして2隻より6000人の部隊を上陸させ、さらにそれから1時間遅れで通常の輸送船が150隻と2等駆逐艦10隻や海防艦で守りながら15万人を上陸させるつもりだった。

それから1週間後に又兵力を上陸させるという、逐次投入で戦略的には良くないかもしれないが、海戦で勝てば本海戦に参加していない空母で大空襲を行えばいいとのことだった。

いよいよ米艦隊との1大海戦が始まろうとしていた。

それぞれの思惑（後書き）

どうも毎回読んでくださってありがとうございます。

そろそろ大海戦を起こそうと思いい場所をフィリピンにしてみました。

兵站や補給のほうについてはまだ知識が足りてないのでそこは大目に見てください。

フィリピン海海戦前夜

アメリカはオハフ島の燃料タンクの実に90パーセントが破壊されていた。そのため老朽艦は出さず新鋭少数ということで意見をまとめた。

しかしキンメルはコレに対し徹底的な反対を行い、大西洋方面の艦隊の燃料をまわせと言い出した。これにアメリカ海軍の上層部は血相を変えるものまで出たが、なんとルーズベルトがこれを認めた。

よってアメリカが出す艦隊は以下のとおりだ。

空母レキシントン サラトガ エンタープライズ ラングレー レンジャールの5隻で構成されており艦載機は277機である。日本のように小出しをせず堂々とだすのがアメリカらしく、良いところだ。しかしこの内ラングレーは排水量が33000トンでありながら艦載機は33機しかのせれず速力も15ノットと低速なため後方支援に向けられた。そのため第1級線で稼動する艦載機は244機である。

戦艦テネシー アリゾナ ペンシルベニア ネバダの4隻である。
巡洋艦サンフランシスコ ニューオリンズ ポートランド インディアナポリス ニューオーリンズ アストリア ミネアポリス
タスカルーサの8隻

駆逐艦シヨール カノン ダウンス カミングス ドレイトン フラッサー リード カニングham カッシン タッカー ポーター
マクダガル ウィンスロー フェルプス クラーク バルチの16隻である。他に給油艦が12隻ついてくる。その護衛として駆逐艦が4隻。

計48隻である。しいていえば潜水艦6隻で54隻である。

2月26日

〇三〇〇 「我、伊16 米艦隊を発見ス 空母4、戦艦4、巡洋艦8、駆逐艦12 速力22ノット
北緯6度42分 東経137度13分」

このとき連合艦隊は台湾にいた。この情報を受け取ると連合艦隊は出撃した。

〇八〇〇 フィリピン沖に日が昇り始めていた。この後起きる惨劇も知らず。

二二〇〇 上陸部隊がフィリピンのラワグに上陸を開始した。まず6000の部隊と九六式戦車が揚げられた。戦車三〇輜その後を歩兵が突き進んでいく。トラックも三〇台。まずトウゲラカオとウィガンを占領し、防衛ラインを作成することが今回の作戦だった。

フィリピンの航空兵力は真珠湾攻撃の6日後に大爆撃を受け立ち直りが不可能なほどの被害を被っていた。

フィリピン軍の防衛軍が上陸に気づき機関銃を撃ってくる。とっさの射撃に2人が倒れた。しかし九六式戦車の8センチ砲が咆哮した。閃光と爆音そして破片などが吹き飛び終わった後は何も残らな

かった。

このあと2時間、日本軍はこの日で10キロ侵攻した。死者や負傷者は早くも80名を超えていたが、それに似合う分の戦果は得れていた。

日付が変わった頃アメリカ艦隊はサマールまで後20キロという距離まで迫っていた。

〇〇二〇 初の艦隊決戦が起ころうとしていた。

フィリピン海海戦前夜（後書き）

次回、激闘フィリピン沖海戦

日本機動部隊の猛攻（前書き）

兵器の解説をいれてみました。少し実史と違うからちゃんと実史は実史、これはこれで分けてね。

日本機動部隊は夜航空機で大攻勢を仕掛けた。

日本機動部隊の猛攻

〇一三〇

戦艦越後以下艦艇は東に向かった。目的地はレイテ湾の周囲である。敵はここで作戦行動を行い兵力の増強を送ってくると判断したのである。しかし、潜水艦の報告によれば、輸送船団を発見してないと言う。が、こちらも主力上陸部隊を後方に控えているため同じ状況だろう。

日本艦隊は朝の6時ごろに機動部隊を発進させることにした。ただ第1遊撃艦隊と第2戦隊の戦艦4隻、巡洋艦4隻、駆逐艦8隻で南下していった。

〇三〇〇 偵察隊より入電があり大体の場所が特定できた。機動部隊は1時間半遅れで鴨田たちの後を追った。

日本艦隊は20分前に6機ほどの偵察機を出している。機体は九四式水上偵察機偵察機の改良型である。

九四式偵察機乙型

全長	14'32	m
全幅	13'90	m
全高	4'8	m
主翼面積	4380	m ²
全装備重量	3000	kg
最高速度	296	km/h (高度500m)
乗員	3	名

発動機 空冷星型複列9気筒「興」一型 離昇840馬力・公称740馬力

航続距離 2200 km

航続時間 12 h

武装 9 mm機銃×1（固）9 mm機銃×2（旋）

60 kg爆弾×2または30 kg爆弾×4

発動機を「興」発動機に替えたものだ。今回の作戦機の96式戦闘機も「興」エンジンに切り替えられている。中国と戦争をおっパじめていたらこれほどのスピードで開発はできなかっただろうと戦後の専門家は言う。しかし96式戦闘機は速度が10キロしか向上せず、最大速度が490キロという速度でおちついた。

だがこの余剰馬力は抜群の運動性能をさらに向上させる結果にながった。このため背後の防弾鋼板の厚みを2ミリほど増やし、9ミリ機銃の携行弾数の数を実60発増やすことを可能にした。余談だがこの頃20ミリ機銃の開発が進んでいた。

ついでに艦上爆撃機なども紹介しておく。

九六式艦上爆撃機

乗員 2 名

全幅 11.40 m

全長 9.40 m

主翼面積 34.50 m²

自重 1775 kg

搭載量 1025 kg

全備重量 2800 kg

発動機 「興」一型出力 離昇840馬力・公称740馬力

最大速度 349 km/h（高度3200 m）

急降下制限速度 537 km/h

実用上昇限度 6980 m

航続距離 1330 km
 武装 9mm×3（機種固定2＋後席旋回1）
 爆装 250kg×1、30kg×2

96式艦上攻撃機

全長 10.15m
 全幅 15.00m（主翼は後方に折り畳み可能）
 全高 4.38m
 自重 1825 - 2000kg
 全備重量 3500 - 3600 kg
 発動機 「興」一型空冷星型9気筒
 出力 740馬力（1200m）、840馬力（離陸）
 最大速度 297km/h
 最小速度 92.6km/h
 航続時間 8時間（1574km）
 武器 7.7mm機銃×2（機首固定・後部旋回各1）、魚雷1
 または爆弾500～800kg
 乗員 3名

そしてその機体は以下の母艦に次のとおり搭載されていた。

「赤城」	（96式戦闘機18機	96式艦上爆撃機18機	96
式艦上攻撃機27機）			
「鳳翔」	（96式戦闘機9機	94式水上偵察機9機）	
「瑞鳳」	（96式戦闘機18機	96式戦闘機9機）	
「蒼竜」	（96式戦闘機18機	96式艦上爆撃機18機	96
式艦上攻撃機18機）			
（補用は含まない）			
計 153機	（戦闘機63機	爆撃機45機	攻撃機45機）

そのころ越後の艦橋では…。

「急いで敵艦隊を見つけてくれよ」鴨田がうなるようにいう。

そこには神重徳大佐がそこにいた。この男は天才肌で鴨田から参謀として乗せさせられたのである。

「長官何故そのようにいそぐのでありますか。確かに早く見つけたに越したことはありませんが」

「輸送船団だって最初の予定では数時間遅れてフィリピンに来るのではなかったのか。しかし敵はまだ遠方にいた」

鴨田は続ける。「そして輸送船団は十分な戦果を挙げている。われわれも早く行けば戦果が挙げられる。そう思っているのだ」

「左様でございましたか」と答えた。

その時、「長官、偵察機より入電です」鴨田は勢いよく振り返った。

山口は不安に思っていた。それは鴨田の航空機に対する考えの甘さだ。地上に対する威力は知ってるようだが未だ戦艦は航空機に勝てると思っているのか？

米軍が太平洋艦隊の空母を全て出してきたらどうする気なのか？恐らく1.5倍はある。その件は会議で言ったが、米軍のパイロットと我が軍のパイロットでは技量が違うはずだ。だから多少の数は心配するにたりんとのことだった。

1.5倍は多少ではない。確かに日本パイロットのほうが優れているかもしれない。だが、過大評価しすぎている。そして相手に対する過小評価の多さ、いったいどうなるのだろうこの海戦いやこの戦争は。山口は不安そうに艦橋から対空兵器を見ていた。

○六〇〇 そのころ機動部隊の甲板からうつすら太陽が見えてきた。それはまさに国旗と同じ日の丸だった。

空母部隊では甲板を蹴って次々と機体が空に舞い上がる。赤城と瑞鳳そして蒼竜から戦闘機36機、爆撃機30機、攻撃機も30機で南の空に向かっていった。

そのころハルゼーは「ジャップの偵察機め、我々を見つけたか。逃げ足だけは速い」と言い迎撃機を上げていた。

上空ではアメリカ軍最後の複葉機、愛称「空飛ぶ樽」正式名はF3F。その名のとおり樽のような太い機体に2枚の羽があり、早くも引き込み脚を採用していた。

縦に短く横に長い人間があまり好まない体系をしているこの戦闘機は950馬力エンジンを搭載し速力425キロで航続距離は1577キロだ。そして武装は7.7?銃1挺と12.7?銃が1挺である。

○六五〇 爆音が空から聞こえてきた。「ジャップは空が薄暗くても飛べるとは進化したな」といいながらハルゼーは心の中で（キルジャップズ キルジャップズ）と叫んでいた。

一方戦艦ネバタに乗っていたキンメルは何か不安に思っていた。

しかし、その戦いはハルゼーの予想を裏切るものだった。アメリカ戦闘機は12.7?機銃で日本気を叩き落す落とすことなど造作も無いことと生きていた。

しかし逆に96式戦闘機抜群の旋回能力で後ろを取ると9ミリ弾が叩き込まれる。アメリカ機は鉄のように固いといわれているが9ミリ弾を何十発と叩き込まれて

平気なわけが無い。この時の迎撃機数は60機にも及ぶが3分の1

が日本氣に反撃もできずに故郷より離れた島の近くの海で散つていった。

アメリカ機が積んでいる12、7？機銃は中に炸裂爆薬が仕込まれてあり、大体20ミリの軟鉄も貫き通してしまふ。96式戦闘機は背後に10ミリ鋼板を用いているがさすがに何発も打ち込まれるホドたえていない。

「96式戦闘機を舐めるなよ！」ガツンという衝撃を受けて腹を立てた栗丘は自分の機体を攻撃した相手を見つけると、上昇し旋回で軽く捻り、斜め後ろ前につくと機首をやや下げるとそこで射撃用の引き金を引いた。栗丘は赤城から発艦したこの道8年の超エースパイロットだ。栗丘の視線には火達磨になったグラマン機が堕ちていくのが映っていた。

アメリカの迎撃機は2倍いたが96式戦闘機にやられ僅かな時間で20機程度までになってしまい、ほとんど迎撃できなかった。それでも1機のF3Fが1機を撃墜したが直後に96戦にやられた。

アメリカ艦隊は必死に対空砲火で応戦した。運悪く当たった機体は海に落ちて悲しき水柱をあげるが、日本爆撃対はひるまない。1系となり乱れず6機が一斉にアメリカ空母レンジャーに爆撃した。

1発目は前方に巨大な水柱 2発目も水柱しかし3はつめは甲板に直撃し、4発目と5発目はエレベータに直撃し6発目は至近弾で艦が身震いした。レンジャーはエレベーターが陥没し、甲板に並んでいた戦闘機がバラバラになった。

「戦闘機には燃料を入れてるぞ、海中に捨てろ」「消化ホースをよこせ！！格納庫にまで火が回るぞ」そこで雷撃隊が接近してきた1000メートルまで接近し魚雷を投下すると機体はふわりと持ち上がる。この時投下したのは右から3本、左からも3本である。

艦長は右に回ってかわそうと

したが無理である。結果左舷後方に2本、左舷中央部1本、右舷艦首付近に1本が直撃し高々と水柱をあげた。レンジャーが見えなくなるほどの水柱が竜のごとく

立ち上がる。それが崩れるとレンジャーは左にだんだん傾斜していった。艦長が総員退艦命令を出したときには甲板上から既に100名ほどが海中に投げ出されていた。

全員が退艦する暇も無く、あっという間にレンジャーは海のそこに引きずり込まれた。

だが、日本攻撃隊の攻撃は収まらない。そうエンタープライズを日本攻撃隊は我先にと狙ったのだ。艦載機100機も搭載できる空母。これを撃沈すればアメリカ

機動部隊は総合兵力の5分の2近くの航空兵力を消耗する。全機エンジンの調子はすこぶるよろしい。

96式爆撃機12機、96式攻撃機が6機襲い掛かっていった。「くそおちろジャップ」アメリカ兵が機銃をふりかざし呪詛をはきすてた。赤く太い弾がするどい発射音を立て吐き出される。

しかし当たらない。右から爆撃機が攻めてきた。左から雷撃部隊が突入してきた。ここにエンタープライズの運命は決した。高射砲の爆発が横で爆発したのも気にせず、赤い弾が両舷から吐き出されている。が、突如として赤い炎が甲板上で爆発し暗い海面を明るくともした。実に12発中の9発が命中したのだ。

火が艦内を覆いつくし消化の希望は消えかけた。甲板を貫通し格納庫に入り込んだ。刹那。キラリと光が輝いた。それは夜空の星とは違い死神が送ってきた星だった。

轟！！

爆風が抜け切れ無いんじゃないかと思うほどの爆風が艦内を襲い

乗員が壁や床にいやというほど叩きつけられた。そこに雷撃隊が止めを刺しに来た。対空砲火など無い。

甲板を越える高さの水柱が6本立ってエンタープライズは艦底が見え出したと思ったら大爆発を起こし30秒で沈んでいった。轟沈だ。

駆逐艦バルチは3発の60キロ爆弾を受けたところに爆装した96式攻撃機から600キロ爆弾を受け艦内で大爆発を起こし、誘爆を次々起こし轟没した。

8分後攻撃隊は意気揚々として帰還した。
アメリカ

空母2隻撃沈 戦艦1隻に至近弾2発 駆逐艦1隻撃沈 他の艦艇に僅かな損傷あり。

F3F 撃墜及び破棄 65機 TBD雷爆撃機71機

日本側

96戦闘機 17機 96式爆撃機 3機 96式攻撃機 4機
が使用不可になった。あくまで使用不可なので撃墜数はもっと少ない。

アメリカ側は迎撃に飛び出た戦闘機の損失より空母にいた艦載機の損失が多くなってしまった。ここでアメリカ機は半数を失う結果となった。

〇七三〇 時間を空け遂に第2時攻撃隊が日本側から飛び立った。

日本機動部隊の猛攻（後書き）

ハルゼー率いる機動部隊は壊滅状態に陥った。そこに越後は今刻一刻と迫っている。

キンメルの戦艦部隊はどう動くのか？

キンメル突撃

日本軍の第2次攻撃隊は戦闘機12機 爆/雷撃機24機で編成された。

この攻撃を行ったが空母部隊は見当たらなかった。戦果は近くにいた駆逐艦に600キロ爆弾を2発命中させ、巡洋艦に魚雷を1発と小型爆弾多数をあて駆逐艦1隻と巡洋艦1隻を撃沈したに留まった。

○九〇〇 キンメルの戦艦部隊とハルゼーの機動部隊は東に1度離脱し、作戦を立案していた。

そういえば前回でてきた「興」エンジンの話をしていなかった。

「興」エンジンは空冷で900馬力を目指しがんでいた。当時900馬力とはとても強大なものだったが、星型エンジンで小型で軽いエンジンを作ることとした。

カムやピストンなどを1新して作成されたのが今回の「興」エンジンだ。またこれに燃費のよさを上乘せして燃費が良いエンジンを作っている。

○九三〇 キンメルの戦艦部隊が北に向け突撃を開始した。

陣容は

戦艦テネシー アリゾナ ペンシルベニア ネバダの4隻。

巡洋艦サンフランシスコ ニューオリンズ ポートランド イ

ンディアナポリス ニューオーリンズ アストリアの6隻

駆逐艦シヨー カノン ダウンス カミングス ドレイトン

フラッサー リード カニングラム カッシン タッカー ポーター

マクダガルの12隻。

巡洋艦2隻と駆逐艦が4隻減少しているのは機動部隊の護衛に当たってためである。

一〇〇〇 「ようやくたどり着いたな」「ああ飯にありつける」

「バカか敵を倒してからだ」この会話はフィリピンのほうからである。先行部隊は東側の制圧に成功した。南側にも侵攻するはずだが増援が来るのを待てとのことだった。

一一〇〇 「鴨田艦長、距離4万メートルに敵艦隊です」「来たか」鴨田はうなずくと外をただ見ていた。

キンメルはテネシー アリゾナ ペンシルベニア ネバダの4隻をはじめとし巡洋艦や駆逐艦で突撃してきた。

日本艦隊は第1戦隊と第2戦隊を水雷戦隊として敵艦のやや斜め前方に向かわせて戦艦部隊は敵の進行方向左70度の方向で進んでいた。山口多聞の山城は空母の護衛だ。

一二二〇 「日本艦隊を発見！水雷戦隊の模様。距離3万」「巡洋艦で突っ込んでくるとは正気か？恐らくとても勇敢なやつかクレイジーな奴だ」

「主砲射撃用意、目標ジャップの巡洋艦」

「ネバタ射撃開始！！」「ペンシルベニア射撃開始！！」「アリゾナ射撃開始！！」「テネシー射撃開始！！」「キンメルの命令により4隻の戦艦が咆哮した。

しかしその瞬間クルリと巡洋艦と駆逐艦部隊は反転してしまった。

「やはり奴らはクレイジーだ。撃った瞬間逃げ出した。最初から来なければよかったのにな」キンメルが軽く鼻で笑うと後ろのアリゾナで爆音が鳴り響いた。

キンメルのは何が起こったのかわからなかった。

キンメル突撃（後書き）

試験対策で時間が取れませんでした。スイマセン。

決戦、フィリピン海

キンメルが驚いていると「アリゾナが右舷に4本被雷しました」通信係のものがさういうと「何？4本魚雷を食らっただと！」キンメルはまだ若い通信員に怒鳴るように聞いた。「…はい」「潜水艦にでもやられたのか」とキンメルは早口で聞いた。「いえ、先ほどの巡洋艦と思います」キンメルは声も出せず艦橋から外の風景をみていた。

アリゾナは中央部に3本、艦尾に1本受けダメージコントロールがあわただしく働いていた。しかし3つの缶室に浸水し、艦尾のほうの浸水は隔壁を次々と突き破りだした。右舷に傾きだしたアリゾナには総員退艦の命令が出され乗員は駆逐艦で救出された。

一方日本機動部隊は九六式戦闘機の援護を出していたため、上空ではF3Fと死闘を続けていたが無駄に死者を米軍は出すだけと悟ったため戦闘機を上げていた。

「巡洋艦を近づけるな」キンメルは駆逐艦に艦隊の周りに円を描くように配置した。「ジャップの艦隊を消滅させろ」「敵艦隊と距離3万です」「よし再度射撃！目標敵戦艦」

「敵が砲撃を始めたようだね。こちらでも射撃を開始しよう」鴨田は艦橋で報告を聞きその時その時で判断していた。「撃ち方初め！」越後の9門の40センチ砲（実は41センチ砲）が咆哮した。

双方の艦隊の近くでは水柱がたっていた。

サンフランシスコ ニューオリンズ ポートランドの3隻の巡洋艦が右側から味方駆逐艦と交戦を始めた。

日本駆逐艦隊は自在に魚雷を発射し寄せ付けなかった。また127センチの豆鉄砲でも進路妨害などには役立つ。

戦艦長門がその時、接近してきた巡洋艦アストリアに直撃弾を出した。距離は2万をきっていたため威力は戦艦が受けても無事ではすまない。それを巡洋艦が受けたのだ。たちまち甲板上の構造物が跳ね飛ばされ血糊で汚れあつというまに沈んでいった。さらにほぼ同時に今度は陸奥がペンシルベニアから直撃弾を受けた第2主砲を砕かれ火災が発生した。後部の3番4番主砲で陸奥は反撃した。

一方米軍駆逐艦は戦艦部隊より前方にグイグイで雷撃を敢行しようとしていた。カッシン タッカー ポーター マクダガルが左からショー カノン ダウンス カミングス が右から突進してきた。

しかし高雄 愛宕 摩耶 鳥海が目の前に立ちはだかった。砲撃戦となった。距離は1万メートルであつたため米軍はおかまいなしに魚雷は発射した。しかし高雄以下4隻は急停止するとその魚雷を交わした。20センチ砲が駆逐艦に向かって放たれた。さらに高雄級は連装魚雷管が4基ついていた。そのため8本の魚雷が撃てた。合計で32本が発射された。日本軍の酸素魚雷は50ノット(90キロ)近い速力が出せる。さらにその時九六式戦闘機が駆逐艦の前進をとめようと艦首に銃撃を開始した。9ミリ程度では威力が無いのだが心理的には結構きいた。カノンが魚雷を受け大破した。またカミングスは魚雷発射管に20センチ砲が直撃した。ちょうど再度発射前だったので誘爆を引き起こし自らの魚雷の爆発で沈んでいった。さらに高雄以下4隻に気をとられていると8隻の駆逐艦が回り

込んで横にいるのが分かった。7隻の駆逐艦は突進したことを後悔しながら回避行動をとったが縦横から迫る魚雷や砲撃はかわせるものではなかった。

戦艦越後が遂に戦艦ネバタに砲弾を3発叩き込んだ。越後は砲身が長いため威力は3万メートルで40センチ装甲が貫ける。ネバタの弦側装甲を突き破ると爆発した。ネバタは13度傾き射撃は不可能となった。

陸奥は反撃に出て1番主砲まで破壊されていたがここに来てようやく敵に直撃弾をだした。41センチ砲が対35センチ装甲しかされていないペンシルベニアに吸い込まれた。このとき双方の距離はわずか2万3000メートルであった。距離が近い分相手に与えられる損害が大きくなる。陸奥はペンシルベニアに再び射撃を行い4発きれいに叩き込み完全に沈黙させた。その後も直撃弾を出し12発打ち込むと大爆発を引き起こし燃える鉄の城は沈んだ。

キンメルは目の前の光景が信じられなかった。アメリカ艦隊が負けているのだ。

キンメル目の前にはまさしく地獄絵図が広がっていた。そこに越後の41センチ砲が飛んできた。

キンメルは壁に体をたたきつけられた。体中が痛んだ。なにか体から抜けていく感覚があるたぶん血だろう。キンメルは薄れ行く意識の中で自分の船が傾いていく感覚をあげわっていた。

越後はテネシーに狙いをつけると2万9000メートルまで近づき砲撃したのだ。結果3発が命中したのだ。越後は斉射を開始するとテネシーを海の底に沈ませていった。

アメリカ艦隊は大破しているものは魚雷で止めを刺されてたりした結果戦艦は全滅した。また巡洋艦

アストリア沈没 ポートランドが大破しサンフランシスコ ニューオリンズが甲板を破壊された。

さらに駆逐艦は9隻が沈められ、1隻大破炎上中であり、実質戦力的に残っているのは2隻という有様である。アメリカ艦隊はギリギリと撤退を開始した。スプールアンスはこのとき空母で指揮を取り、見事な撤退を見せた。日本艦隊は深追いをしていたが潜水艦の神出鬼没という事態が多々起こり、スプールアンスの戦闘機が九六式戦闘機がいなくなったとたん現われ機銃で邪魔をしてきたのだ。

鴨田は不満そうだったが戦果は悪くない。駆逐艦白雪、初雪、白雲、磯波が沈没したがこれだけで損失はすんだ、と思っていたが帰還時に陸奥が潜水艦による雷撃を受けた。なんとかレイテ湾にたどり着きそこで座礁した。以後レイテ要塞として扱われるのだがここはまだ日本軍が上陸していない。そのため皮肉なことに砲戦であり撃てなかった金剛型戦艦がふんだんにレイテ湾に艦砲射撃を開始した。

さらに高速輸送船2隻と護衛艦6000名の兵力をまわしてもらいレイテ島占領を始めた。しかしこれで島のアメリカ軍は度肝を抜かし混乱し日本兵に降伏した。

そのころフィリピン北部は日本軍が完全に占領していた。

大本営はいつもは誇張している戦果報告をそのまま話した。完全勝利フィリピン海戦と騒ぎ始めた日本国内をみて、「この戦争は日本の大勝利で終わる」と思う人が大半だった。

米軍爆撃機を撃墜せよ

この日、日本陸軍では新たな新型戦闘機の完成で盛り上がっていた。

九七式戦闘機。

今までにない引き込み足、そして新型機銃九七式9ミリ機銃。

九七式9ミリ機銃の弾は中に爆薬が入っており、12.7ミリ機銃には及ばないが9ミリ機銃の威力の1.5倍に及んだ。また弾の質量を重いものにして重量を増やしていたため威力は大きい。

それを機首に2丁ずつつけられていた。また機体下方に携行弾数180発の20ミリ機銃が装備されている。

そして夜間型としても使えるように発動機排気口のやや後方に前向きのライトが装着できるようになっていた。

その発動機は「興」発動機の最終型になる「興」33型だった。空冷星型複列14気筒の1100馬力が発揮でき、前のと比べて燃費がよくなった最新の発動機で速度が515キロ、航続距離がタンク有りで2400キロにも及んだ。

防弾対策もしており背後に13ミリ鋼板と操縦席の翼の付け根に5ミリ鋼板が備え付けられ鉄線や電気溶質などで翼周辺の剛性が増している。

風防は涙滴で背後からの奇襲を避けることができる。その風防は前と後ろが2重の20ミリ防弾ガラスとなっている。

防弾燃料タンクとなっており、翼内にしか燃料タンクを置かないことにより操縦席に火が回りにくくしている他、炭酸ガス排出が機

体の下についている。

爆弾搭載量は攻撃力並みの60キロ〜250キロ爆弾が2個ずつ積める。

また都内の96式戦闘機ほぼすべては従来の9ミリ機銃から新型の9ミリ機銃に切り替えられていた。

この日B-10/2型が15機東京に向かい不気味な爆音を立て日本海に侵入した空母の甲板をけて飛び出した。

第18任務部隊

ウィリアム・F・ハルゼー中将

空母「ホーネット」 重巡洋艦：ノーザンプトン

重巡洋艦：ヴィンセンス

軽巡洋艦：ナッシュビル

第52駆逐隊 駆逐艦：グイ、グレイソン、メレデス、モンセン

給油艦：シマロン

さらに付属

重巡洋艦：ソルトレイクシティ

重巡洋艦：ノーザンプトン

駆逐艦：ヴァルチ、ベンヘン、ファニング、エレット 給油艦：

サビン

米軍はB-10/2で本土空襲を企てたのだ。B-10/2型はエンジン転換で速度・航続距離を延ばしたものだ。

これを日本の哨戒艇が発見した。

この哨戒艇は漁船改造のオンボロ改造艦で戦闘となれば8ノットの速力で逃げられないし、武装も9ミリ機銃1門とまともな戦いはできない。

あっという間に沈没させられた。

しかし日本側に連絡は行き届いていた。

九六式戦闘機24機と最新鋭の夜間用九七式戦闘機12機が滑走路より慌しく飛び立った。また96式攻撃機が12機雷激装備で6機の九六式戦闘機護衛を従えて当海域に向かった。

B10/2型が15機編成を組んで東京に向かっていった。速度300キロで飛行していた。

突如3番機の右側エンジンが火を吹いた。外部の装甲がバラバラに吹き飛んで速度を落とし、機首をガクリを下げて海中に降下して行った。

「ジャップ！」

7・62mm機銃計42丁がバラバラに放たれた。

上から下から日本機が乱舞して機銃を浴びせてくる。

九七式戦闘機の20ミリ機銃は1発あたっただけで致命的な損傷を負う。20ミリ機銃が当たった機体はでっかい風穴を開けられ碎け、幾百の破片になり海に降り注がれた。

最高速度400キロにも満たない機体がしょうがなく作戦を中止して空母に帰還することにした。しかしそれを上回る速度の日本機がみすみす逃すわけがない。

ちなみに作戦立案当初は中国に着陸する予定だったがソ連の進撃の影響でそれができない。

命からがら逃げれたB10/2型は3機だけだった。

一方そのアメリカ空母は日本軍の攻撃を受けていた。

「右からジャップの機体が3機突っ込んでくるぞ」「面舵一杯」

「よし戻せ！速度最大」

慌しく艦橋では命令が出ている。しかし遂に 駆逐艦グイに1本と重巡洋艦ノーザンプトンに3本が命中し両方とも数分で沈んでいった。

空母は沈まなかったがまったく無駄な作戦だった。

この戦いで日本の被害は哨戒艦3隻撃沈 戦闘機1機破損 攻撃機1機大破

アメリカはまたも海軍力を削ったのであった。

中国侵攻

3月8日 マレー侵攻の日本軍部隊が破竹の勢いで進撃を進めていたところだった。

陸軍はフィリピン諸島の侵攻をいよいよ本格的に始めていた。

そのころ陸軍が最近満州地方に盛んに輸送船で兵員や物資を送り届けていた。最初是对ソ戦の準備かと思われていた。

3月15日

突如、満州の関東軍60万人がなだれのごとく中国領土に侵攻し始めた。政府は中国に宣戦を布告した。

満州に備えられていた35センチ砲が火を吹き中国軍の防衛網を吹き飛ばした。度肝を抜かれた共産軍が我先にと敗走していった。

この日ソ連と黙秘で同盟を結成した日本軍は中国侵攻に大兵力を向けた。これにより南方作戦に若干の支障が生じた。全体的に実に25パーセント以上の兵力を中国侵攻に向けたのだ。

上空より陸軍の新鋭戦闘機九七式戦闘機が250キロ爆弾を叩きつけ、荒鷲の武勇を見せ付けるかのように機銃掃射を行っていく。新鋭の九七式戦車が進み8センチ砲でトーチカ陣地を粉砕した。火砲の支援の下、日本兵が塹壕に踊りこんできた。たちまち激しい肉弾戦となり近接戦闘が得意な日本兵が優位に立った。

最新鋭兵器を可能な限りつぎ込んだ日本兵に中国軍はなすすべがなかった。

日本軍は南京にただ突き進んだ。

機関銃の発射音とともに共産軍がなぎ倒され、後から銃剣を光らせ唯々突き進む。空気を切り裂く音と共に地面がえぐれ振動しそれを象徴するかのような爆発音が聞こえる。

火砲や空襲は民家や軍事施設、人、家畜に容赦なく襲い掛かり瓦礫の山が築かれ、あたりには死臭と火薬のにおいが漂っていた。

3月16日

「化け物軍艦を見た」漁船に乗り沖に出ていた沖縄の一人が仲間にそういった。「本土のほうは上げ名でかい船を作つてすごいな」と言った。その漁船の人の仲間は「だが沖縄の海はやっぱり漁船が似合っている。沖縄の海は平和が一番だあ」

その化け物軍艦とは戦艦越後以下16隻だ。

戦艦「越後」「金剛」「榛名」

巡洋艦「高雄」「愛宕」「摩耶」「鳥海」

駆逐艦「桜」「柳」「椿」「檜」「樫」「榎」

輸送船「阿蘇丸」「豊後丸」「ふいりびん丸」

駆逐艦は旧式で速力も27ノットしかなかったが改装が行われており28.5ノットまでに上昇していた。

対潜用の駆逐艦として建造されている。

輸送船は高速輸送船だ。この前1隻建造された。

この艦隊は速力16ノットで台湾に向かっていった。

大本営より受信「沖縄二 雪降ラズ」

「長官付きました」「うむ」鴨田の姿がそこにはあった。

「艦砲射撃とはむなしいな」「まあそういわずに」神がなだめた。
「まあ日本が勝つならそれに越したことはない」

「全主砲 砲撃開始」

台湾近海の海域から戦艦の砲撃音が轟き中国大陆に降り注がれた。

中国侵攻（後書き）

日本がついに中国に宣戦布告。
戦いはどうなるのか？

狂乱の国々

戦艦越後以下の艦隊はさらに西側の海域に移った。台湾のやや南側の西海域に海南島という島があるのだが、連合艦隊が移ったのはその中間地点である。地理が得意な方はお分かりいただけただろうか？

そう香港だ。ちなみに最初砲撃していたのは今で言う深山高速道があるところであり越後の41センチ砲が12発 20センチ砲60発が打ち込まれただけだった。

ちょうど深山を砲撃したのは3月16日の11時いや二三〇〇と記しておくべきだろう。

香港を砲撃したのはその後30分後だ。

対艦陣地などが木っ端微塵に吹き飛んだ。兵士は恐れをなして早くも撤退を開始した。

3月17日 〇〇二〇 高速輸送船より上陸用舟艇が下りていく。また巡洋艦に300名ずつ、戦艦に400名ずつ乗っていて合計7000名と九七式戦車30輜と1400名の工作員 12機の96式戦闘機 500門の火砲等があわただしく揚陸されていた。

「日本兵が香港に侵攻したぞ」「おい聞いたか台湾に面している湾も砲撃を受けてんだる南方はもう日本兵で埋まってるよ」「上からソ連下から日本進むのはどこだ」

中国兵がパニックに陥っているのを尻目に広東を3月19日に占領した。また台湾では現役兵士1万人を高速輸送船でこの地方に送り、台湾内陸では義勇兵を駆り立てられ、台湾独立義勇軍を編成し

た。

3月19日 上海や青島にも部隊を送り込みそこに関東軍が来て中国兵を簡単に駆逐してしまった。日本兵は早くも南京にも迫ろうというほどの勢いだった。

また南方ではアメリカ太平洋艦隊の燃料がすべて1時使用不能煮まで追い込まれているため連合艦隊の海といっても過言ではなかった。

そして植民地政策だがまず硬貨が問題だ。日本の金を渡しても向こうには通じないのだ。そのため軍券といわれるのを発行してこれをお金の価値と同じものとするなどというものであった。果たしてこの政策は正しかったのか？

このときの歴史を振り返りある人は語る「日本が中国と戦う理由が分からない」と。

1937年3月21日 ついに全世界が狂ったことを証明すべくことが起こった。ドイツ第3帝国がソ連と不可侵条約を結びポーランドに侵攻。ドイツ軍が？／？号戦車と共に大攻勢に出た。

この？号と？号はソ連に技術提供の変わりに生産させてもらった兵器であり、主砲が機関銃というもので、装甲が13ミリ、速度も37キロと97式戦車に劣っているが、軽戦車であり（九七は中戦車）本命の？号戦車のつなぎのための戦車だったためだ。

その？号戦車は政策が遅れたらしい。ヒトラーがあせった理由はアメリカが今まともに動けないと見抜いたためである。そうすればイギリスなども黙っているだろうと考えたのだ。

そもそもヒトラーがポーランドを攻めた理由はポーランドにある

領地の併合を要求したのに、ポーランド側がこれを断つたためである。

来るべき時は来た。ポーランドはドイツ軍の火炮で目を覚まし、戦闘機が乱舞する光景を見るなり上空から爆弾や機銃を受け、戦車で攻撃を受けて1日遅れでソ連までもが侵攻してきたからである。こうして1ヶ月でポーランドは壊滅した。ドイツの被害は2万とかわめて少なかった。

講和なるか？飛驒起工

3月31日

日本軍はこの日までにスマトラ、カリマント、ジャワ、ニューギニア、ラバウル、ウエーク島、マーシャル諸島、ギルバート諸島にまで上陸し有利な戦いをしていた。

アメリカ艦隊がまともに動けない状況下で3000隻の輸送船を使用した補給作戦を実行していた。大西洋方面の燃料も少なくドイツが戦闘状態に入ったため太平洋だけには艦隊が振り分けられない。さらに太平洋方面での燃料が開戦前の10パーセントも無いのだ。扶桑が突入したおかげだ。そのためアメリカ艦隊は駆逐艦や巡洋艦などの作戦しか出来なかった。

しかし、水上部隊ではない艦隊が動いていた。

竜の鳴き声のごとく巨大な音が聞こえた。水柱が高く舞い上がった。日本輸送船が右に12度傾斜した。そうアメリカ軍は潜水艦による通商破壊作戦を行っていたのである。オーストラリア方面に20隻、太平洋方面に30隻を配備した。

その攻撃された輸送船と共に行動していた輸送船が慌てて9ミリ機銃×20ミリ機銃×1〜4丁で海中に射撃を加える。再び艦が振動した。ついに航行不能となってしまった。

突如他の輸送船めがけて8発の魚雷が連続で発射された。ドンドンと衝突音が聞こえた。だが、それだけだった。魚雷はことごとく不発であったのだ。これでは「魚雷」ではなく「魚棒」だ。アメリカの魚雷は不発が多かったのだ。さがて航行不能だった船も6ノットの鈍足で動き出した。アメリカ潜水艦の艦長は一時期自殺を考えたが無理も無い。

合計で50隻を配備したのにもかかわらず大小17隻の輸送船が

沈められたに過ぎない。水兵800名や燃料そして機関銃、大砲などが海のそこにずんだが、全体として0.6パーセントにも満たない損害しか出してないのである。

アメリカ海軍がこうしたことをしているさなかフィリピン方面のアメリカは追い詰められてコレヒドール要塞に立てこもり戦闘を続行し日本軍に多大な損害を与えたがついに4月2日降伏した。指揮していたマッカーサーは「アイシャルリターン」と言葉を残して潜水艦で逃げた。もっともフィリピンはアメリカが勝手に植民地化したものであり現地住民がこれを聞いていたら戻ってくるなと思われたであろう。

4月7日

この日高速輸送船が今あるのを含めて7隻が建造された。これにより合計で1万4000名と重砲70門と機関銃1000丁と分解されている96式戦車が20両運べる。つまり火力が少し少ないが1個師団の戦力が送り込めるのだ。

海軍はさらにこれの建造を求めたが需要大臣の村山などコストの面で不可能とされたため新たな建造は未定である。

さらに新たに勃発した日中戦争で実に25パーセントほどの物資を割かねばならず戦線の拡大に基づき現在マレーなどから多量の物資が輸入しなければならなかった。村山は陸海軍の計算で使用される物資では、補給が追いつかないことは無いが輸送船が20パーセント破壊されれば難しくなると判断した。

それをきき陸海軍はアメリカ艦隊が動けないということを利用して講和作戦を図ろうとした。

内容は、領地は北満州を放棄しそれ以外は戦前と同じもので、貿

易は前回と同じもとし5年は新たな戦艦を止める。おおざっぱに言えばこんな感じの文章を突きつけた。

時差の関係で4月8日ワシントンのルーズベルトの下にこの文書が届いた。

果たしてどうなるのか？

4月10日 ニューギニア

「敵襲だ アメリカ軍だ！！」それは平和の合図とはまったく異なるものだった。

そのころ戦艦越後の2番艦が長崎の造船上で建造された。その名は「飛驒」。

「アメリカは平和を望まず戦争を好んだ」などという文が国外に出され「ソ連」と「ドイツ」がこれに同調し猛烈な批判を行ったが、効果はあまり無かったようだ。

戦艦飛驒は後1ヶ月で前線に送られる予定だ。

講和なるか？飛驒起工（後書き）

講和を求めたがアメリカはこれを拒否した。そのさなかで越後の2番艦に当たる「飛驒」が完成した。

突然の襲来

それは文字通り”突然”であった。時刻は〇六〇〇見張り員が欲していた睡眠という世界に米軍の新鋭機F4Fワイルドキャットが永遠に送り込んだ。同時に”双胴の悪魔”の名称で親しまれるP-38ライトニングの2種類が同時攻撃を行ってきた。このワイルドキャットは素人でも落とされにくく、危機的な状況になったら逃げれる機体を作成してくれと言ったことより開発された艦上戦闘機だ。

96式戦闘機と同じ種類でありながらずんぐりとした形をしている。またP-38は双発の戦闘機だ。武装は20mm機関砲1門、12.7mm機関銃4門が機首に装備された非常に強力なものだった。そしてワイルドキャットは12.7mm機銃を4つ装備した戦闘機だ。

ニューギニアには3万名このとき上陸していた。しかし戦闘機は36機しか配備されていなかった。対して敵機数は60機にも及んだ。36機のうち数機が地上撃破された。そして舞い上がった瞬間急降下しながら射撃を加えてくるアメリカ機に火達磨にされた。ともに空中戦等の体制には入れたのは26機だった。身軽な動きで9mm機銃をいつも通り敵の胴体、翼、コックピットなりに照準機をみるまでもないほど接近して撃つが、墜ちない。確かに白煙は吐いているようだが飛行に問題が無いようだ。驚愕している97式戦闘機にP-38が機銃で射撃を加える。13?防弾をしているとはいえその13?(12.7?)機銃が4丁も有り、20ミリ弾までも装備されているのだ。勘が働いたパイロットは軽やかな動きで交わしたが、やはり数名が餌食となった。この9mm機銃は新型ではなく従来のもので使用していて、必死の整備をしていたがどうも発射速度が遅くなっていた。新型タイプは砲身を長くしたり装填部分の改良でそんなことは無いのだが、従来タイプはやはり急に製作し

たものだからそこにボロがでたのだ。

兵舎は機銃で穴だらけにされ木片となり崩れていき、カバーされていない弾薬庫を20ミリ機銃が襲い、弾薬庫もろとも吹き飛ばし、整備兵や対空機銃をあわてて打ち出した兵士を土砂のそこに埋め込んだ。

30分の襲撃を終え敵は帰路に入った。そこには無残に壊された廃墟同然の基地と凸凹の滑走路があった。兵士達は自分たちは死と隣り合わせにあることを実感し、救助作業や復旧作業を焦点の合わない目をしながらどんより行っていた。

破壊された97式戦闘機は28機に及び、残る8機の内1機が使用不可だった。一応人命を重視した設計（日本としては）をした97式戦闘機は36名中20名を生かしたが16名の熟練パイロットを敵機を対空機銃の戦果とあわせて18機で失ったのである。

そして本土にこの連絡が届いたのは数時間後のことである。陸軍の無線で島伝いに連絡された。この情報に日本軍は驚愕した。まずオーストラリア側から来たということだ。そんな長い航続距離を持ちえる戦闘機があるのかということと、旧式とはいえ9mm機銃を数十発当てなければ墜ちなかったということだ。また重傷者や基地の損害なども深刻なものだ。

鴨田、山口、山本五十六、米内、豊田などの云々で大規模会議を開いた。

山本と山口は大体次のような主張だった。「敵が新型航空機で来たのなら新型機で返り討ちにすればよろしい。いまこそ強力な我戦艦2隻で援護しつつ空母を中心とした艦隊を編成したほうがよい」

山口はそれに加え「海防艦を大量に作成し輸送船などの安全を今後は確保すべき」といつていた。それに対し豊田は「いや航空機で戦艦を撃沈できたのはネルソンだけではないか。いまのところアレしか撃沈できておらず、あれは単なる偶然ではないか。おまけにあれは長門とだいたい同じ年代だが旧式戦艦で、速力も遅く防御力も低く対空兵器もあまり装備されていないではないか」事実500キロ爆弾が貫通した話は有名である。また対空兵器はこの時代では一般的だが確かに少ない。

「そして今後も対空兵器は進化を遂げる。航空機では戦艦に太刀打ちできない」と言ったところで鴨田が「話がずれている。大艦巨砲主義だの航空機主義だのこの際関係ない。敵の撲滅についてだ。率直に言うとニューギニアに戦艦を移動させ敵の脅威を払いのけ、いつきに制海権を握るといふものだ」と言った。米内は「つまり長官は航空機はいらないとおっしゃるのですか」と聞くと「戦略の段階ではな。そして豊田が言ったとおり対空兵器を現存の艦に装備させれば敵機も寄り付かなくなるだろう」と言った。「では燃料のほうはどうします？」山口が聞くと「それこそ君達が言った航空機で運べばよろしい。輸送用の機を開発してな。もちろん水上艦にも働いてもらう」「そこでございますが、その水上艦に護衛をつけて輸送の安全を…」と言ったところで「潜水艦のことか？大した脅威になってはいないでは無いか。そもそも彼ら（アメリカ兵）の生活環境ではあのような狭い空間での生活は無理だろう」とまでいいだしたのだ。後者のほうは完全なる妄言である。

その後も会議が続く結局護衛戦力はおろか空母増産計画も見送られたままで最前線に水上艦集結させるとのものがだった。これが結局自分の首を絞めることになることも知らず。

突然の襲来（後書き）

試験前夜なのでもうこれ以上時間はつぶせません。毎回読んでくれるかたがたには感謝しています。これからもどうぞよろしく願います。

MO制圧作戦

4月14日

堂々たる姿で波をける連合艦隊の姿がそこにあつた。

編成は戦艦「長門」「伊勢」「日向」の三隻。他には駆逐艦が四隻付いているだけだ。と、思っていたが高速輸送船7隻が物資を満載し16ノットの速力で航行していた。

この輸送船の中には復旧用の道具、戦闘機、弾薬そして増員として、歩兵第216連隊、山砲兵第33連隊及び衛生兵1000人だ。

こうして来たるべくしてきた4月17日 ○九〇〇

高速輸送船の陸揚が行われた。送られてきた戦闘機は97式戦闘機9機、96式艦戦12機、97艦攻24機である。大砲はというと高射砲であり最新鋭のものだった。そう88ミリ砲である。50門につき200発程度のものだが、十分な火力になりうる。

また歩兵隊の装備は新型の98式歩兵銃だった。銃身を1メートルにまで切り詰めた後、9ミリ弾を使用しており連射可能だったが、そんなことをしていればすぐに弾が不足するのは目に見えているため1発撃つごとに、ロックがかかるようにされており一回一回引き金を引かねばならない。

しかしそれでもかなりの高性能な銃でありマガジンは10発と22発の2種類がある。有効射程距離は1000メートルを超えており貫通力も従来の38式歩兵銃より格段にあがっている。

そして内地よりきた優秀なパイロットもひとつの武器だった。従来のようにしてはパイロットの予備が出来ないとされ、検査を緩くして多くの人を採用し3人で1機の機体を時間交代で使うようにしたのである。これで従来の3倍ものパイロットが出来るわけだ。

そのころヨーロッパ戦線ではドイツが仏、英にたいし宣戦布告。

170個師団でフランス国境に進出した。

このころになると？号戦車ができた。速度は40キロで防御は並大抵の砲撃では破壊されない。主砲は50ミリであった。ドイツ空軍はbf109で制空権を取り、ハインケル He 111が上空から爆弾を投下しそこに戦車が突撃し、砲兵がかく乱させるという電撃作戦を展開しフランス軍をダンケルクに追い詰めた。イギリス海軍はヨットまで利用し撤退作戦を開始した。さらに上空には航空機300機。

ドイツ陸軍はフランス軍を逃がすまいと追尾した。戦闘機200機、爆撃機300機で奮闘した。駆逐艦7隻、小型艦300隻が沈められ、捕虜が3万6000、航空機190機、死亡者1万4000という大損害をイギリス海軍に被らせた。ただ30万人が撤退していった。

兵器と違って人間は簡単に作れないためイギリス軍の判断は正解だったといえよう。

MO制圧作戦（後書き）

どうも10日ほど放置してました。

さてヨーロッパ戦線も燃えてきました。MO制圧作戦はどうなるのか？

MO制圧作戦Ⅱ2Ⅱ（前書き）

前回戦艦「陸奥」を勝手に復活させていました。すみません。訂正しておきました。

MO制圧作戦"2"

ポートモレスビー方面のアメリカ・イギリス軍は実に2個師団を配置していた。そこにP-38やP-36などの戦闘機や新鋭爆撃機B-17が総合で120機近く配置されているのである。

この部隊の殲滅は決して容易ではない。

しかしそれを突破し無くてはならないため島伝いに97式戦闘機を30機と哨戒機2機、97式重爆撃機6機が続々とニューギニアの日本軍滑走路へ足をつけ着陸してきた。

日本軍は南海支隊と歩兵第216連隊が陣地を突破するため森林を突き進むのだ。そして97式戦闘機を中心として上空警戒を行う。また山砲兵第33連隊の88ミリ砲の支援も受けられるため指揮を挙げつつ1万3000名ほどの日本兵はスタンレー山脈を超えていくのだった

スタンレー山脈とは正式名所オーエンスタンレー山脈といわれ4072メートルという標高を持ち、後にスタンレーの魔女がいるといわれる場所だが、それはまたの機会に説明しよう。

ニューギニアという前線基地で「長門」「伊勢」「日向」と駆逐艦を第2艦隊の一部の第3戦隊として訓練を行っていたのだった。40センチ砲8門搭載の長門と35センチ砲10門を搭載した伊勢型戦艦は堂々とした姿を沖で走らせた。

そして97式戦闘機などは上空の警戒に当たり又訓練をしている。

伊勢型戦艦は燃費が非常に悪かったため配置される前に改良をしていて少しばかりの改善が見られている。

一方の同じく第2艦隊の越後は飛驒の練習期間終了まで日本での待機を命令されており後1週間ほどの期間を過ごすこととなる。

そのころ空母部隊は航空機優先論を鴨田から無視されて大規模な演習を行うことも無かった。

そして4月20日ポートモレスビー総攻撃の準備がされていた。長門型戦艦と伊勢型戦艦の計3隻はポートモレスビー側に船体を進めた。またアメリカ軍の奇襲を受けながら進んだ日本軍もいつでも攻撃できる状態にあった。この補給を可能にしたのは大八車だ。第八車とは日本で荷物の輸送に使われていた総木製の人力荷車である。江戸時代から使われているものだ。人力での輸送で小回りが利き重量が少ないためこういう場所の輸送にはもってこいなのだ。

駆逐艦4隻が四角形を作成し中心に戦艦部隊を置いている。

〇〇〇〇 月が海に映りゆらゆら揺れている。その上を戦艦3隻が白波を蹴飛ばしながら進んでいることは既述のとおりだ。

「長官 後30分ほどで砲撃地点に付きます」と徳永栄大佐へ言う。「そうか」と表情を変え無かったが、満足そうな顔になったような気がした。

その時だった爆音がしてきてピカリときらめく物があつた。オレンジ色を帯びた赤色の火線が銃声をなびかせている。「やれやれ。航空支援などしてくれと言った覚えは無いぞ」とあきれたように空を見上げてきた。そのとき徳永艦長は銃声がなっているということに只の航空支援ではないことを悟った。

そして背中に凍る寸前の冷水をぶっかけられたような寒気を感じ武者震いをした。

「アメリカ機です」「2時の方向から戦闘機と雷撃機接近」「何

！？」敵が気付いたのだろうか？

とりあえず指示を出した。「対空戦闘開始」「左40度 仰角10度 2000」一気に高角砲が一気に咆哮し、空中に黒煙がバツト出てきて数機が海中に落下した。「副砲を海面に撃ち敵の進路を妨害しろ」艦長の命令どおり副砲に俯角がかけられて一気に左側の副砲が咆哮した。巨大な水柱が立ち上り3機が翼をもがれ撃墜された。

それでも30機ほどが突っ込んでくる。「取り舵30度！」

伊勢型戦艦には20機が襲い掛かってきた。起工してから30年ほどの老朽艦ではあるが太平洋戦争のやや標準的な機能であった。

「引き付けろ…よし撃て撃て！」空気を切り裂く甲高い音と水面で砲弾が炸裂する音戦闘機の機銃掃射の音、対空気銃の音、高角砲の音が絶え間なく聞こえた。

そして遂に戦艦長門に砲弾とは又違う水柱が立ち昇った。

珊瑚海海戦

長門は船体が一度浮いたかと思うとすごい勢いで右側に傾きその衝撃で発生した波で甲板が洗われ、水兵が4人黒い海に引きずり込まれ二度と浮かんでこなかった。長門は少し平行に戻った。

「被害を知らせよ」すばやく徳永艦長がよろけながらも命令を下すと「艦橋中央部に1発命中」という声が伝声管を伝わってきた。その横では1人の男が計器をずっと見ていた。艦橋には船がどれだけ傾いたか分かる計器が付いている。1度、2度：そして「5度傾いています」と言った。

「意外と少ないな。さすがだ」と感心していたがそれどころではない。現在空襲を受けているのだ。そして速力22ノットまで低下しつつ回避行動を行っていた。

その時魚雷命中箇所を塞ごうと毛布や板を持ち一所懸命応急手当をしようとしていたが、いかせん回避行動を行っているため浸水はどんどん強くなる一方だ。

さらにアメリカ攻撃隊は手を緩めない。戦闘機からは小型爆弾が小石のように投下される。第2主砲天蓋に命中した。しかしこれはこれは弾き飛ばされなんの被害も無く茶色の汚れが付いただけだ。弾き飛ばされた爆弾は海中に落下しそこで爆発した。

数十分後：戦闘は終了した。長門は魚雷を受けたのを除き物理的被害は無かった。しかし機銃掃射で計30人が死亡し、50人が負傷した。

長門は速力を一気に落とすと応急措置をすばやく行った。ここで沈めてたまるかといわんばかりに働く。排水ホースが破裂しそうなほどの海水を吐き出し、皆広がった穴をなんとか塞いだ。

作業は30分続いた。

〇一二〇

「少々遅れたな。それ敵さんに仕返しをしてやれ」

徳永は参謀長と話をしながらモレスビー砲撃を決行した。さすがに陸軍を見殺しには出来ない。

「全主砲砲撃開始！」長門、伊勢、日向が16インチ砲弾8発、14インチ砲弾20発を一度に吐き出し轟音と共に海は明るくなった。目的との距離は3万メートル離れており攻撃を受ける心配は無い。すき放題すればいいのだ。陸軍の攻撃は〇二〇〇から開始されるため40分間だけで出来るだけ多くの目標を破壊する必要性がある。

第二次攻撃の準備をしていたアメリカの攻撃隊は滑走路を破壊され司令塔は炎上した。火薬庫は破壊されなかったが半数の戦闘機が鉄くずに変わった。その傍ら頭に血が上ったアメリカ軍はB-17という怪鳥を駆り闇の空に消えていった。

〇一五〇

主なアメリカ軍の野砲がつぶされアメリカ軍はジャングルへ逃げ出したりさえした。もうじきで砲撃終了をかけようとしていたその不気味な爆音が聞こえ伊勢がいきなり水柱で囲まれた。何が起こったかわからないがやられたと直感したが、水柱が消えうせると伊勢はその姿を見せた。

対空戦闘開始。しかし敵の姿は見えない。

かなりの高度にいるんだと確信した徳永は高角砲・主砲・副砲とところかまわず仰角を最大まであげて砲撃を開始させた。

不気味な爆弾の落下音がする。至近弾で破片が艦橋の窓ガラスを突き破り閃光が視界を奪った。とにかく回避行動するしかない。

日本艦隊の高角砲は弾幕がはれないという欠点があるが、結構高性能で日本海軍ではもっとも多く使用されたものである。

その時日向の第5砲等に250キロ爆弾が命中した。轟！！第5番砲を突き破るとそのまま火薬庫で大爆発を起こした。日向は一度膨れたかと思うと後部の甲板が吹き飛んだ。そこから炎が火山の噴火のごとくでて煙がもうもうと立ち上った。

〇二〇〇 日本陸軍が総攻撃を開始した。

珊瑚海海戦（後書き）

書いてたのに1回消えるという事故があった。

MO炎上

〇二〇〇 日本軍は目が飛び出るかのごとく睨みながら、ひたすら突進してくる。森林に逃げ込んでいたアメリカ・オーストラリアの連合軍が襲撃に気づいた時は月の光を浴びている銃剣に刺し殺され赤い液体が飛翔した。

「He was very absorbed（なんてこった！）」アメリカ兵士が小銃の引き金を引くまもなく後ろからまた別の日本兵が後ろから思いつきりその兵士を刺した。

米豪陣地からはパツと光の線が上空に駆け上り赤々とした小型の太陽のような明かりが上空に広がった。するとあたりは昼のような明るさになるのだった。しかしもう遅い日本軍は目の前に来ている。さらに今までの日本軍とは比較にならないほどの射撃が来ている。98式歩兵銃のおかげだ。98式は今までのボルトアクションとは違い引き金を引いただけで弾が発射されるのだ。さらに9ミリ弾は発射音が大きくないのだ。これを利用してくぼみか何かに隠れこっそり射撃を行うという戦法を使用した。ゲリラ戦法に近い。

さらに後方より88ミリ砲が援護射撃として撃たれる。飛来音が聞こえ米兵がなぎ倒され戦車が紙のようにふきとばされ砲塔がひしやげ爆発し、周辺の物資は無数の破片へと形を変えた。

紅蓮の炎が照明弾に負けずおとらず明かりを照らす。第1防衛線、第2防衛線などは10分足らずで突破された。

連合軍は雪崩を打ち南方向へ敗走した。日本兵は死体を乗り越え追撃戦に入った。

〇二二三 B-17が突如として日本艦隊への爆撃を中止した。ポートモレスビーへ戻ったのだった。長門がこの野郎と主砲を編成へぶち込んだ。この射撃で一機が破壊され回転しながら下のもう一機を巻き添えにして海中へ墜ちた。この射撃は長門最後の射撃だった。戦艦日向は後部の火薬庫が艦砲射撃のため残り少なかったため誘爆を複数回起こすことは無く火災も何とか鎮火できそうだった。

駆逐艦は一隻爆撃を受け停止したところにもう1発が命中し主砲の射撃音より大きな音を海中で轟かせつつ轟沈していった。

戦艦長門は第2砲等に直撃弾を受けるが汚れて、少しへこんだだけで別に問題は無かった。

〇二二五 日本艦隊は陣形を組んで当海域より離脱した。長門最後はあまりにも悲惨なものだった。偵察員が何か言ったのが見えた。瞬間：ものすごい音がした連続だった：徳永艦長はその音が二度と聞けないほど右耳を強く床に打つ付けられ船の傾きと共に壁に転がった。

参謀がおこしてくれたがどうにも助かりそうに無い。

「弾薬庫に火が回るぞ」という声が聞こえたような気がした。突如下で何かが暴れているような感覚に襲われ第2主砲の天蓋が吹き飛んだ。赤い炎が砲塔から出てきて艦橋にぶち当たった。網膜を焼かれた艦長は唸り声を上げると、次の衝撃でガラスに倒れ掛かった。次の瞬間ガラスが2度目の爆風で砕き割られそのまま無数のガラス片に突き刺され転落死した。前代未聞の最悪の死に方であろう。

長門は20度傾いた。次第に激しく傾斜がついていった。日本艦隊は敬礼をしよう沈むものと考えそのまま撤退した。

しかし長門は3日間その姿を残していた。どうやら破壊された材質で穴がある程度ふさがれたようだ。

その長門を発見したのはポートモレスビーを制圧した日本駆逐艦が発見した。曳航しようとしたがとても出来る状態ではなかった。

その次の日いくと長門の姿は無かった。
つまり長門の姿を見たものはいない。

潜水艦用の駆逐艦が二隻沈んだのが直接的な問題でないとかはどうでもよいが、今回の海戦で戦艦3隻中一隻沈没、一隻大破した。日向と伊勢は内地に戻っていった。

多大な被害は被ったものの大戦果を収めたため大本営は例の誇大報告を行った。

ポートモレスビーを制圧したため事実上オーストラリアと米軍は連絡がかなり困難となったのであった。米・豪軍は2万500名中1万名が戦死した。いまだ数百名がゲリラなどで抵抗を続けたが主力はほとんど捕虜となった。4月20日高速輸送船が連合軍捕虜を内地へと連れ帰った。決して悪いように扱わずむしろ客人のように扱われた連合軍は日本側の尋問に若干ためらいながら話したのであった。客人のように扱ったのは情報を聞き出すためであった。

鴨田はこの結果を聞き。勝ち誇ったように低い声で笑った。

「ここまでくれば後もう一息でオーストラリアを制圧でき、ドイツがイギリスを占領すれば中国を占領でき、アメリカも講和に応じるだろう。いや降伏してくれるな」とその次の日の会議で言った。

一方山口は例の問題をいった。

「長門の潜水艦の問題ですが…」すると鴨田はじつと山口を見るなり「まだそんなことを言っているのかね君は。…だが確かに考えが必要だ」

「では、対潜用の装備を…」

話は続き海軍は1週間後対潜レーダーの作成を正式に要請したのであった。

MO炎上（後書き）

5つの作品をローテーションをして書いているためなかなか更新できないんですが、冬休みだとすばやく更新が出来ますね。
さて対潜レーダーはどうなるのか？日向の修理はいかに？

ポートモレスビー戦記（前書き）

何か忘れてたような… あっやバ！！b - 17 忘れてた！！

ポートモレスビー戦記

俺は新妻三郎。所属は陸軍歩兵第226連隊。名前のとおり3男だ。家が比較的裕福だったので家族全員どつしりとしていた。そんな俺が陸軍に入ったのは18歳の時、一朗兄さんは家の事情で軍隊にはいかなかった。だから二郎兄さんと1年違いで軍隊に入隊した。最初の2年はほんとうに訓練が厳しく軍隊上問題の上官によるいじめがあつた。幸い俺は何かしらへまを起こさずいじめにあうことはほとんど無かつた。二郎兄さんもなかつたのは体が頑丈そうなためなのだろうか？

そして4年がたち俺は兵長に昇格した。ちなみに二等兵から一等兵まで1年いれば自然にそうなる。一等兵と新人の違いは2年しかない。

この兵長というのは上等兵の内100人中とか50人中から数人しか昇格できないという位だ。兄は満州地方の地方に送られ、俺はこの暑いニューギニアに送られてきた。

戦闘機が訓練のため上空で編成を組んでいる姿はいかにもすがすがしかつた。そんな俺たちに課せられた任務とは森を抜けて敵陣地に向け侵攻して、敵を殲滅しなおかつ通信施設・軍事施設をすばやく占拠するとの事だつた。

そして森に入る前には艦砲射撃が援護としてくるという嬉しい情報があったのだつた。

そして進みに進み遂に俺達は数十分前：つまり夜中の2時に敵陣へ突撃したのだつた…。

先ほどまで簡保射撃の音が聞こえていたが引き返したのか艦砲射撃が行われている様子は無い。俺は98式歩兵銃を頼りに敵を撃つとすばやく前進しくぼんだ陣地にかがんだ。そのとき若干丘のような場所にいたため非常に湾が見やすかった。

自慢の視力2.5で…見ると…水平線のはるか向こうの海が燃えていた。燃えている船が2つ…3つ…4つ…海中で破片が燃えているのもあるのだろうが間違えなく見方の船もやられている。敵・見方の銃声と砲声が絶え間なく聞こえる中で俺は普段聞いているとは異なる爆音を聞きつけた。

段々近づいてくる。上空を何か怪鳥のようなものが通っているような感覚に襲われたその時。砲弾の落下音とは比べ物にならないものが味方兵士のところに落ちた。聞こえてきたのは断末魔の叫びだった。目がくらむような閃光が覆い土埃がもうもうと立ち込めた。俺はどうなったかが気になって戦闘などまったく無視していた。土埃が減り少し見え出したとき黒い焦げたような土の上に…。それは変わり果てた姿だった。まず俺はそれが人間だったと最初分からなかった。

その近くでまた爆発音が…味方は大混乱に陥り敵は一時的に体制を建て直し機関銃を撃ちかけてくる。逃げまとう兵士が幾千の銃弾に襲われた。

憎しみが頭を支配し俺は撃たれるのを覚悟に立ち上がり接近した。そしてここぞとばかりに98式歩兵銃の引き金を8回ほど引いたとき敵の機関銃弾が吐き出されるのがとまった。よし！！当たった俺は確信した。ところが…。

オレンジ色の小石のようなようなものが無数に俺のほうに飛んで

きた。距離500本能的に伏せたときは、俺の体に既に数発の弾が突き刺さったときだった。軽機だったため腕が飛んだりなどのことは無かったが腹に3つほどの8ミリの穴が開きそこから血が噴き出た。水筒が割れて冷たい水が体をぬらす。せめて最後に水をとる水を飲んだ。すると意識が幾分かしつかりとした。

軍服の下から何かしら役に立つかと思ひ布を入れていた。その布を取り出し腹の穴を押さえすっかり赤黒くなつてしまつた軍服を上にした。ミシンのような銃弾が飛んでいる。爆発音と共に上空から何か投下され、それが味方の陣地で炸裂する。地面が揺れる。

いつ爆弾が自分に止めを刺してくれるのか？銃弾が何故あたらないう？早く殺してくれという願いと共に生きたいという矛盾した気持ち引いては押し引いては押しと相撲のごとくせめぎ合う。

すると新しい爆音が鳴り響いた。この音は…。

意識が薄れてきた…上空で機銃掃射の音がする。上空で何かが爆発する音。味方の歓声…突撃ラッパだ…突撃しなくては…いやもういい、疲れた…。俺の意識は消えてなくなった。

「おい新妻！死んでるのか」ん？うるさいな誰だ？

俺はまぶたを開こうとしたが開かない。手は動く。

「おっ！早く起きるか」はい分かつてます。

手で目を擦りながら体を起こした。ぼんやりとしてはいたが目が開いた。

「貴様大丈夫か」ああ同期の島田か。

島田とは同じく兵長で妙に馬が会う奴だった。

島田の顔がぼんやり見えてきた。

「勝ったぞ」俺はその声を聞くと自然に笑みを浮かべた。

死臭と火薬の音が漂う中日章旗が翻っていた。

島田の話によると味方のニューギニア航空隊の精鋭がb-17を叩き落して敵陣地に機銃掃射を行い、そこで突撃命令が出たため一斉に敵陣へ向かい敵主力を殲滅・降伏させたのであった。

誇らしくポートモレスビーに翻る日章旗を見て俺は戦友の亡骸を片付けていった。

ポートモレスビー戦記（後書き）

主人公を1人書きそれを中心に話を進めるのもなかなか書きがい
があつて楽しいです。

次回からはどのような展開になるのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112w/>

戦艦越後太平洋戦記

2011年12月25日14時47分発行